は荒地となりて遺されん（馬太傳廿三章三七、三八節）。

とは、必ずしも猶太國についてのみ云うた語ではありません。

我國は維新以來、このんで西洋の文物を採用しました。その多くは基督敎の產物であります。千九百年前、イエスキリストが獨り受けたる醜き十字架の上に、咲き出でたる美花であります。すなはち憲法と代議政體とは、イエスの唱導せし個人の自由と尊貴とが形を取つて現れしものであります。東洋に此事なかりしは、之れを生む力が佛敎になかつたからであります。赤十字事業は日本にては愛國的事業となつてゐますが、これは其起原に於て愛人的事業であります。イエスキリストの大愛の精神が英國の一女子の心に宿つて、生れ出たものであります。また百般の慈善博愛の事業のごとき、その起因の何れにあるかは史家を待たずして明かであります。

我國はかくの如く泰西基督敎の美花を移し來りました。しかし其根幹を棄てゝ來ました。たゞ枝を伐り來つて、之れを花瓶に植ゑたのみであります。花瓶にいけたる花の凋むべきは、當然の運命であります。これ日本今日の大困難の由つて來る所であります。されば我國にとつて、基督敎の信受ほど緊要なことはありません。これ此國とその民とを活かす唯一の道であります。曾て儒敎を受け入れ佛敎を受け入れたる日本國民が、外敎のゆゑを以て基督敎をのみ斥けんとするは、寛大なる君子國民の態度として怪しむべき限であります。

最後に私は、自分のことを少々申上げます。私は徒らに日本國を貶して、西洋諸國を崇拜するものではありません。私は今日の歐米諸國に於て、基督敎の大墮落を見るものであります。私は歐米の宗敎なる故を以て、此敎を信じたのではありません。私は內心の深き要求よりして、また內心の僞りなき實驗よりして、ナザレのイエスを信じたのであります。彼に至つて初めて我が根本の要求を充たされ、わが苦悶と懊惱を醫やされ、眞の救濟と云ひがたき恩寵とに接したるため、感謝一身に溢れて彼を信ずるに至つたのであります。信ぜずには居られなかつたのであります。

ゆゑに私は父祖の宗敎を棄て、多くの人の嫌惡と冷笑との中に、我身相當の小なる十字架を擔うて此宗敎を信じてゐるのであります。私にとつては日本國は極て貴き

國であります。私は殺伐の劍を好みませんが、しかし私の血管には日本武士の血が通つて居ります。もし私が大和魂を棄てゝ、基督敎を信ぜねばならぬならば、私は基督敎を信じたくはありません。しかし幸にして、キリストは我等に日本武士たる誇りをゆるしてくれます。私はあくまで日本武士の精神を抱有しつゝ、基督敎を信ぜんとするものであります。

もし我兄弟わが骨肉のためにならんには、或はキリストより離れ沈淪（ほろび）に至らんもまた我願なり。

とのパウロの語は、私の心に強き響を傳へます。

私は今日の日本の基督敎會を好みません。それには種々の理由がありますが、敎會とその敎師等が徒らに西洋人の糟粕（かす）を嘗め、西洋人の願使する處となつて、日本人たるの武士的精神を缺いて居るのが、其理由の中の大なるものであります。もし私が敎會に反對して獨立の旗幟を飜してゐる〇〇〇〇先生に、十二年前に接しなかつたならば、私は基督信者にはならなかつたでありませう。獨立不羈の先生の精神が、私を動かしたのであります。そして今私が恩師の驥尾に附して、敎會以外に立

ちて小なる傳道をなし居るは、そこに全き自由と獨立とがあるからであります。日本人としての根本精神を棄てずして、神を信じまた傳へ得るからであります。諸君、諸君は諸君の祖先の立派な精神を棄てずして、ナザレのイエスを信ずることが出來るのであります。これ私の理性と經驗の充分に證明する處であります。

＊　＊　＊　＊

その後、毎月一回余の脚は必ずM村に向ふ。しかし心のキリストに向ひつゝある村人は二三に過ぎぬ。さはれ天の恩惠は此村に溢れて、森は依然として黑く野は依然として青い。たゞ人の心は……、人の心は……。（大正五年五月稿）

我心境に住む詩人の群

天然の詩人ウォルヅヲス

詩人ウォルヅヲス！　彼は余が舊き友である、また新しき友である。初めて彼の名作『呼子鳥に與ふ』を誦したのは、十數年前のことである。そしてその大作『回遊記』(Excursion)を讀了したのは、一週間ほど前のことである。あゝ我生涯の永き友よ、恐らくは汝は我一生の伴侶たるであらう。學生時代に、汝が雄篇『チンタンアベエの歌』その他二三の講解をT先生より受けた時、余は未だ汝の偉大を領得することは出來なかつた。校を出でゝ後、田舍教師として獨り寂しくありし時、心靈の悲愁淺からぬに會して、初めて汝の本具する價値と慰藉力の深妙なるを學んだ。其時肉の友は無くして、靈の友なる汝と余の交りは、いやさらに深くあつた。余は其時、二大長詩を除きて、汝の作品の重なるものを讀んだ。今は表紙も磨れきれし

汝の全集――これ今より十年前の某日「中西屋」に於て求めしものである――の見返しに、左の如き英字が記してある。これ此の教師時代に於て認めしものである。

My friend, dead in body, but living in spirit in all men's heart.
(譯、肉に於ては死せるも靈に於ては萬人の心情に生ける我友)
This book drives away all our petty troubles and worries.
(譯、此書われ等が凡ての小不平小煩惱を逐ひやる)
The best companion of cloudy days except the Special One.
(譯、イエスを除きては曇れる日の最上の友)
Wordsworth, a man of unfathomable original power.
(譯、ウチルヅヲス、測り知るべからざる獨創力の人)

これ英文としては劣惡なるものである。しかし當時に於ける我が心情そのまゝの表白として、我心の歴史の一部を語るものとして、全く無價値のものではない。

貴き詩人よ、我が獨立生涯の過去五年半に於て、汝は彌が上にも我友であつた。我獨立傳道の生涯は、フチックスやウエスレイよりも、寧ろカアライル先生や汝に倣

ひて營まれしものである。魯鈍なる余も、その魯鈍相當に、汝が獨立の生涯に象(かたど)らんことを願つたのである、願ふのである。貧しきこと汝の如く、自由なること汝の如く、此世ならぬ幸福にあること汝の如きは、わが理想の境である。

俗界の紛爭より退き、
靜かなる幽居を選びて、
平和怡樂の境にあるを我は深く喜ぶ。
隙るゝも此世の務を怠らず、
逃るゝも埋まるることなし。
歌と、熱心なる思索と、
いつにても樂しき讀書と、
貴き友誼の力ある慰藉と、
家庭の幸福とありて日々樂し。

これ彼が獨立生活の實際であつて、余が倣はんとしつゝあるものである。

貴き我友よ、汝に象(かたど)りたる生活に入りてのち、余は汝を我同胞に紹介せんとの翼

欲を起した。乃ち汝の詩の未だ讀まぬものに目を通して、汝が全詩集中より最良と信ずるもの五十七篇を選拔した。これを翻譯し、それに解說を附した。一ヶ年の刻苦は『ウヂルヅヲス詩集』となつて世に現はれた。しかし骨折りて骨折り榮(は)えのなきは此著述であつた。友等の期待は見事にうらぎられた。あまりに原詩の辭句に忠なりし飜譯そのものゝ不出來は、誰が目にも著しくあつた。あゝ詩人よ、余は汝の金玉を化して瓦礫となした。罪は決して輕くない。たゞ汝と余との交誼ます〳〵親みを加へしは、そが明かなる所得の一であつた。

讀者よ、余は玆にウヂルヅヲスの思想について語らうとするのではない。しかし彼が余に與へたものに就ては、一言せねばならぬ。彼は余に健全快爽なる天然觀を與へた。余は彼によつて自然に對する肯定的觀察に誘はれた。彼は天然に光明と歡喜を觀て、暗黑と悲哀とを觀なかつた。花を看ても、虹を眺めても、小鳥を聽いても、星を仰いでも、「痛むが如き歡喜と眼眩(くるめ)くばかりの恍惚」を彼は人に傳へた。そして此歡喜と此恍惚とを彼は人に傳へた。

わが周圍の鳥はおどりぬ、遊びぬ。
彼等の思念は知りがたし。
されど彼等のなす微動すらも
歡喜のゆらめきと思はるゝなり。

これ彼が天然觀の要訣であつた。彼は光明に包まれし自然界を余に示して、余をして彼に倣ひてそれを觀ることを學ばしめた。

天然の光明は至上者の光明である。肢體の輝けるは、本體の輝ける所以である。されば光明の肢體を見るものは、即ち光明の本體を見るものである。千八百〇二年の秋、佛蘭西を漫遊せんとしてカレイに上陸せし時、詩人は振りかへりて落日の大景を見た。その時彼は歌つた。

聽け！　絶大者覺眼てあり。
その久遠の運動をもて
雷のごとき音をいだす――永久に。

また或時詩人は雲雀について歌つた。

幸福なる、幸福なる生活者よ、
汝は谷川の如き强き靈をもて
全能者に讃美を注ぎいだすなり。

詩人はまた或時は、グラスミヤ湖畔の葦に大靈の低き囁きを聽いた。また巖上の櫻草に「神は凡てを支持する」ことを學んだ。天然を通して至上者の妙なる愛に觸るゝは、我詩人の獨壇場であつた。もとより彼はキリストの忠實なる追隨者であつて、心靈に於て神とその愛とを實感せし人であつた。これ『刻銘』、『回遊記』、その他彼の多くの詩の語る處である。しかし乍ら之は必ずしも彼の獨壇場ではない。之に長ずる人を求めんとせば、おのづから他に人がある。しかし乍ら、天然を通して神に至りたる人を求むるに於て、我等は彼れ以上の人を探りあてることは出來ぬ。

彼は又、その天然觀に似たる人生觀を余に敎へし人である。小兒と老人に天國の光輝著しきを見たのは彼であつた。老いし乞食も老いし蛭取者も、彼を以て見れば快爽靈活の者であつた。彼は人生に對して常に建設的態度を取つた詩人であつた。

彼は勞働を讃美し、職分を貴び、誠實なる勞作者を祝し、實生活とその努力を重んじ、忍耐、美德、名節、修德の人を稱揚した。

順境に臨むも、逆境に落つるも、
心のまゝに榮ゆるも、榮えざるも、
己の最も貴むことを得んと勵みて、
その他の道を少しも顧みず。
危難のかげに驚かず、
幸福の思ひにみだれず。
前を望みて勵みに勵み、
日々に努めて善より善に進む。

とは彼の理想とする人の生活であつた。彼は人生の光明面を見た人であつた。その暗黑面が彼の眼に映らなかつたからではない。かの光明を以て此暗黑を驅逐せよと、彼は敎ふるのである。『回遊記』中の僧侶の態度は、即ち彼の此態度である。盲して怨まず、聾して呟かず、夫を失ひ妻と別れて傷まざる人々の實例を數々擧ぐる僧は、

人生に對する詩人の肯定的態度の表現せられしものである。

人生に對する這般の肯定的態度は、永生の希望をもて其必須の要素とせねばならぬ。何となれば、人生終局の肯定は永生の希望に外ならぬからである。而して詩人が名作『幼時の追懷より永生を知るの歌』、『比ひ少き光明莊美の夕に作れる歌』其他に、此希望のいとゞ著しきを見て、その對人生の態度の因て來る所を認むることが出來る。彼が永生の信仰には、一種不可思議の哲理が含まれて居た。この哲理の眞か否かは我等の關知せぬ處、我等は唯、「永生の大海の姿をみとめ」「死の彼方を見とほす信仰に賴」りし彼の態度を偉とし、「天に昇る眞の道と見ゆる彼輝々たる階段を凝視」し得たる彼が心靈の視力を歎美する。我等も亦人生の晩景に處せし時は、

わが靈なほ地に閉ぢこめらるれど
第二の生誕に雀躍(こをどり)すなり。

と歌ひ得る者とならねばならぬ。詩人ウォルヅヲス、彼は我に永生てふ大問題を提供し、永生思慕の情感を以て我胸を波うたせし恩人である。我友にして恩人なる汝

よ、願くは我が永久の伴侶たれ！

人生の詩人ホイットマン

ウォルヅヲスに次いで我心境に住む詩人は、ホイットマンである。余が初めて彼の名を知つたのは、高山樗牛の『時代管見』に於てゞあつた。此書に於て、彼は單に肉派の詩人として紹介せられてゐた、彼の詩は單に肉感的のものとして判斷せられてゐた。これ極めて淺き觀察であつた。しかし罪は此觀察者に非ずして、寧ろ其時代にあつた。然らずとするも、近代の產したる大詩人の名を先づ第一に日本に紹介したる功蹟は、この淺き觀察者に歸すべきものである。內村鑑三先生のホイットマン論が現はれたのは、餘程後のことであつた。當時袖ケ浦の僑居にありし余は、海をわたりて來る自由の風に浴しつゝ、詩人が奔流の如き不羈快爽の思想に觸れた。かくて余は戀を逐ふ青春き人の如くに、彼の詩集を求めた。しかし之を書肆に於て見ることは出來なかつた。僅かに The Penny Poets 中に收められたる彼の詩の拔萃

を手に入れ得たのは、一二年の彼なき寂寥を味ひし後であつた。そして Astor Edition 中の彼の詩集を購ひ得たのは、實に一ヶ月前の上京の際であつた。

過去に於ける彼と我との關係は、右の如くである。彼の詩にして余の未だ味はざるものは半以上である。故に余は彼について、此上更に學ばねばならぬことを承知してゐる。しかし乍ら一事は萬事である。余は既に彼の何者なるかを知つたのである。彼の思想の如何なるものなるかを知つたのである。そして彼を我胸にひしと抱いたのである。そして彼と我との交りは、益々密ならんとしつゝある。これ既往現在の彼と我との關係の事實である。されば彼の思想の紹介を目的とせざる余も、この彼我兩者の關係については、尙ほ少しく記さねばならぬ。

余が基督信徒としてホイットマンを愛誦するを、異とする人があらう。そして彼等は曰ふであらう、その思想は汎神論的にして、そのペンは肉を描いて憚らぬ彼を何故に然く貴むか、むしろテニスン、ローエル、ホイッチャ、ブライアント等の基督敎詩人を愛好すべきではないかと。余はもとより、明白なる基督敎的信念を有せし

詩人たちを輕んずるものではない。否、彼等を重んじ彼等の詩を貴ぶ點に於て、必ずしも人後に落つるものではない。しかし乍ら、余が彼等以上にホイットマンを愛するのには、それ相當の理由が存してゐる。理由とは他なし、彼は余を廣くしてくれるからである。彼等は概して基督教思想の範圍内に於て、宇宙と人生とを見た。然るに彼はその圏外に自由獨立の立場を持して、思ふがまゝに——擅まに、奔放に、自在に、無拘束に、在來の凡ての傳統すべての形式を離れて、自己自身の眞我そのまゝを開いて——心ゆくばかりに宇宙と人生とを觀察した。詩人として、彼等は整へるも狹く小さくある（彼に比しては）。彼は粗雜なるも廣く大きくある。彼は必ずしも彼等より深くはあるまい。しかし慥かに博大である、廣汎である。而して彼の自由奔放なる觀察の結論が、偶々イエスの精神に接近するに至りし事は、彼等が既定の定木（ぢやうぎ）を以て測りたる報告の當然イエス的なるべきに比して、ヨリ力强きものであること云ふまでもない。必ずしも詩人としての彼の天分の彼等に勝ることを云ふのではない。彼の態度そのものに、余は抑制し難き强き同感を覺ゆるのである。

テニスンの詩には、肯定の底に懷疑の色が濃い。故に彼は多く將來の希望を强調して、現在の慰藉となした。ブライアントの詩は、憂愁に始つて安慰に終る。故に深沈なれども歡喜の凱歌に乏しい。もしそれ徹頭徹尾、歡喜と肯定と建設と快活とを以て終始するものは、即ち我ホイットマンである。「おゝ健全なる快樂」と叫びて彼は彼の實感を語つて居るのである。彼は實に光明より發して光明に終る詩人である。言ひ難き光明は彼の凡ての詩を輝（かがや）かし、極度の歡喜は常に彼がペン先より踊り出づ。まことに彼は、不可思議にして匹疇なき一種の靈感——第六感とも云ふべきもの——を有する詩人である。此靈感を以て有形無形の萬事萬象に對する時、凡てが之に應じて光明の色彩を反射する。光明の本源を拓いて萬象を之に浴せしむる快手に至りては、詩界いまだ曾てその比を見ざる所である。陰鬱なる東洋思想に育（はぐく）まれたる余は、彼の積極的光明觀によりて心界の雲霧を拂ひ去られしこと如何ばかりぞや。我心に廣濶なる天地と快爽なる氣分を供したるは彼である。

故に彼は、有形無形の有りとあらゆる萬物を讃美する詩人である。何物に接して

も、彼はそれに意味と價値とを見、その光明的方面（ブライトサイド）に着目した。砂一粒、草一葉、蟲一匹、獸一頭、それが皆彼の友であつた。蟻も、蛙も、馬も、豚も、皆ひとしく彼の讃美を受けた。

私は萬象を視る似た物は一もない、凡てが善い。
地球は善い、天體は善い、そして彼等の附屬物も悉く善い。

これ宇宙萬物に對する彼れ獨特の見方である。そして彼の動物を讃美する語に次の如きものがある。

私は動物と共に動き共に住むことが出來ると思ふ。
彼等は平和にして自己に滿足してゐる。
私は時には一時間も一氣に立つて彼等を眺める。
彼等は彼等の境遇について焦慮（あせ）つたり泣いたりしない。
彼等は暗中に目を醒まして己の罪のために泣かない。
彼等は神に對する義務を喧（やかま）しく論じて私を惱ましない。
一匹も滿足のないものはない、物を欲しがつて發狂する者はない。

仲間の或者に對し又千萬年前の同類に對して拜跪の膝を屈める者はない。

殊に彼が有らゆる人間とその有らゆる境遇に光明を見たのは、その博大なる人類魂と、その底知れぬ積極的態度を示すものである。

曾て生れし凡ての男は我兄弟である、凡ての女は我が姉妹、我戀人である。

とは彼の人類觀の要訣である。そして此一句を引き伸ばしたのは Salut au Monde（世界に挨拶す）と題する十二頁にわたる彼の詩である。此詩に於て、詩人は地球上の有らゆる國と場所と山川風物を掲げ、あらゆる國民と人種とを擧げ、奴僕、囚人、不具者、盜賊、殺人者までも列擧せし後、その健康を祈り彼の好意を寄せ、「我等各人は皆無限である、みな神聖である」と喝破してゐる。然るのち彼は云ふ。

私の心靈は同感と決意をもて全地を廻（めぐ）つた。
私は同輩と戀人を探したが各地に於てそれを見出した。
私は或る神聖なる關係が彼等を私と同等ならしめたのだと思ふ。

げに比類なく廣大なる同感と稱すべきものである。そして凡ての階級、凡ての職業、及び人の凡ての境遇についての讃美を奏で出でたのは、Poem of Joys（歡喜の詩）と

題する一編である。技術家の喜び、騎士の喜び、砲手、戰士の喜び、母の喜び、歸省の喜び、生活と勞働の喜び、舟行航海の喜び、漁人の喜び、農人の喜び、老年の喜び、壯年の喜び、苦難の喜び……と擧げ來つて盡くるを知らぬ如くである。

おゝ苦難の喜びよ！
大苦難に對して戰ふこと！　怯まずして敵に對すること！
敵とのみ共に在ること！　我持久力を試すこと！
奪爭苛責牢獄民衆の憎惡死に敢然として對すること！
斷頭臺にのぼること！　平然として砲口に向つて進むこと！

これ其一節である。「生ける限りは、生の奴隷たらずして生の支配者たり、且力强き征服者として生に對せんこと」は我詩人の願であつた。人生に對して全き勝利と喜悅とを實現したるは、我詩人であつた。かくの如き詩人の歌に接しては、誰人もその陰濕と憂悶を棄てゝ、自ら同感の洪波を起し、高らかに歡喜の歌を誦するほかない。我を廣くすると共に、我心靈に巨火を點じて光輝と曖昧とを兼ね起したる彼に對して、余は心より感謝を捧ぐるものである。

凡ての境遇に光明と歡喜を見たる詩人が、死に對しても然りしは、云ふまでもなき事である。げに死を讃美せし詩人にして、彼の如く著しきはない。ウォルヅヲスも、テニスンも、ブライアントも、希望と慰藉を以て死に對した。然るにホイットマンは歡喜と勝利を以て之に對した。彼等の態度は希望を以て暗を貫いて光明に入るのであつた。彼の態度は歡喜を以て光明を貫いて光明に入るのであつた。一歩の差――しかし著しからぬとは云へぬ。吾人は前者を貴むに於て吝なる者ではない。しかし全然死を征服したる詩人としては、後者を擧げざるを得ないのである。

生誕を幸福なりと想つた人があるか？
私は人々に告げねばならぬ、死も亦生誕と等しく幸福であると。

これ彼の力强き斷定である。

此の生誕は我等に豐滿と多趣とを持つてきた。
他の生誕(即ち死)も亦豐滿と多趣とを持ち來るであらう。

これ彼の力つよき想像である。余は彼の死の歌について、曾て世に紹介したことが

ある（聖書之研究百六十四號及び百六十五號）。故に今これを省くを適當とする。要するに、全心に溢るゝ勇氣を以て未知の大海に船出するを唱ひし彼の死の歌は、寔に死の歌に非ずして新生の歌である。ウォルヅヲスより來世の仰望を與へられたる余は、ホイットマンより來世の實在を示された。「希望を以て悼め」とテニスンに敎へられたる余は、「欣べ！船友——欣べ！」とホイットマンに敎へられた。「かくまで欣喜雀躍の語を以て他界に去りし人を近代に見ず」との彼に對する批評は、正鵠を得たるものである。偉なるかな近代詩界の第一人者！

讀者よ、誤解する勿れ。余は決してホイットマンの思想を以て、完全無缺とするものではない。何れの人にも缺陷はあると云ふ方則は、彼にも亦適用せられ得る。しかしそは玆に指摘するも詮なきことである。我等は彼れより受くる許多を以て滿足すべきである。余は生に於て、死に處して、彼が如き確信と勝利と同感と愉悅とを味ひ度きものである。あゝ人生に勝ちて逝きし詩人よ、願くは我等を鼓舞し、我等をして汝に倣ふものとならしめよ。

理想の詩人トロウ

北米合衆國を以て思想界の貧弱國となす人がある。哲學科學の方面に於て、或はさうであるかも知れぬ。思想論策の方面に於て、或はさうであるかも知れぬ。よし、さうであるとしても、玆に一の除外例がある。それは詩界である。米國詩界の祖（the Father of American Poetry）にして「米國のウォルヅヲス」と呼ばるゝキルヤム・プライアントが、十九世紀の初頭にその活動を開始してより以來、ロングフェロウ、ホイッチヤ、ロウエル等、所謂「新英州詩人」の一群、斯界の名星として輩出し、遂に稀有の天才ホイットマンの出現となつた。彼等に共通せるはその豐かなる人生味である、殊に人生に對する建設的態度である。燃ゆるが如き理想と、痛むが如き信念と、輝くが如き希望と——これ彼等の特有物であつた。長き歐洲詩歌の生粹を採り來つて、錦上更に華を添へしは彼等であつた。ラスキンの所說に從つて二流三流の詩人は暫く除外するも、十九世紀百年間に於ける米國詩界の靈偉は他に類例なきも

のである。

右の如き詩人の列に、余は更にヘンリ・デイヰッド・トロウを附加し度く思ふ。彼はチャニングに源を發し、エマスンを頭首とし、マアガレット・フラー、ブロンスン・アルコット等を含む所謂超越派（the Transcendentalists）に屬する文士である。散文家である彼を、詩人の列に加へるは不適當であるかも知れぬ。むしろ一種の思想家と見るが正しいかも知れぬ。しかし天然味と人生味の漲溢せる彼の文章を讀みて、余は如何にしても彼を詩人の一人と見ないわけにゆかぬ。所詮、文章は外部の形にして内部の眞實體ではない。故に内部に於て詩人たりし彼は、眞の詩人であつたのである。詩人とは詩を云ふ人でなくて詩を爲す人であると、カアライルは曰うた。

トロウをウォルヅヲスに似たるもの——或意味に於てウォルヅヲス以上——として初めて日本に紹介したものは、内村鑑三先生であつたと思ふ。それは二十年も前のことであるが、怠慢なる余がトロウの文を讀み始めたのは、やう〳〵四五年前のことである。彼の文は概ね隨筆樣のものであるが、實に痛快な文章である。カアラ

イルに似た光焔があつて（彼はカアライルに私淑し、又カアライルのために辯護の筆を揮つた）、世人の輕佻を罵る時には、カアライルの熱罵に比すべき骨を刺す冷罵がある。その行文の特異にして他の模倣を許さぬ點は、彼の天才の人たるを證して餘りある。力强き警句は無數にある。奇勁なる思想は隨處に發見せられる。しかも其筆一度天然と天然物について動かんか、深き同感と鋭き觀察と優雅なる思念と相伴つて、彼の詩人たる天分を豐かに語る。

次に掲ぐるは、彼の孤獨を讃美せし短文の中にあるものにて代表的警句である。

I love to be alone. I never found the companion that was so companionable as solitude. We are for the most part more lonely when we go abroad among men than we stay in our chambers. A men thinking or working is always alone, let him be where he will.

〔譯文〕 余は獨り在るを好む。余は孤獨に勝る伴侶を曾て發見したことはない。我等は室内に居る時よりも人々の間に居る時の方が大抵は寂しいものである。考へてゐる人、働いて居る人は、どんな所に居らうとも、常に獨りである。

The sun is alone, except in thick weather, when there sometimes appear to be two, but one is a mock sun.

God is alone,—but the devil, he is far from being alone; he sees a great deal of company; he is region.

〔譯文〕 太陽は獨りである。たゞし霧多い日に二つ現れることは時にはあるが、其時は一は僞の太陽である。神は獨りである。然るに惡魔は獨りどころではない、仲間を澤山に有つてゐる。惡魔はレギオン（一聯隊）である。

斯くの如き種類の語は、彼の著書の一頁に二つも三つもある。實に奔放自在と云ふべきは彼の文章である。何等の規矩も、何等の拘束も、それに於て發見することは出來ぬ。不屈の意氣と不羈の態度と、奔流の如き思想と勁拔なる斷案とは、彼の文章の著しき特色である。ウォルヅヲスの所謂「山間の急流の如く强剛なる」は彼のペンである。

文章に於て勁拔なるは、思想に於て勁拔なる所以である。奔放にして規矩に入らざる彼の思想を、他人が系統的に再現することは難い。たゞ其の人生觀——社會觀——の要點だけは明かである。彼は文明社會の複雜生活に對して、原始的單純生活を唱道した。文明人士が自ら求めて餘計な荷物を背負ひ、その重さの下に苦しんでゐるを彼は愚なりとし、現代人心の苦惱と懷敗とが玆に胚胎してゐる事を彼は說い

た。石炭の煙と勞働の喧囂に取圍まれて活動！活動！と叫びつゝある米國に於て、彼は單純と靜寂と休樂とを說いた。人は働くために生れしもの也との時代思潮の中に、彼は人は自然を樂むべく生れし者也と說いた。Almighty gold!（全能なる黃金！）を叫ぶ同胞の中に、彼は Almighty simplicity!（全能なる單純！）を叫んだ。「器械たるべき時を持つのみ」なる文明人を彼は憐んだ。「病氣に罹つた時の用意として貯金しようとして、病氣に罹つて居る」現代人を、彼は愚なりと眺めた。

しかし彼は時代の病患を救ふためにのみ、單純生活を唱へたのではない。複雜、過勞、奢侈の生活は人間を賊するものにして、人間の眞生活と人類の向上のためには、單純にして內的に充實せる生活を送らねばならぬ、と彼は主張したのである。彼はその名篇『經濟』(Economy) に於て曰うた。

贅澤品の大部分及び人生の慰安と稱せらるゝ物の多くは、不用品であるのみならず、むしろ人類向上のための積極的妨害物である。贅澤品及び慰安品に於ては、古來聖者賢人は貧乏人よりも尙ほ單純にして乏しい生活を送つた。支那、印度、波斯、希臘の古哲人は外部の財に於ては誰人よりも富んで居た。內部の財に於ては誰人よりも貧しくあつた。しかし

以て彼の精神を知るべきである。The life of simplicity, independence, magnanimity, and trust（單純、獨立、宏量、信頼の生活）は彼の理想の生活であつた。彼が原始に歸れ！と叫んだのは、徒らに半野蠻生活を歎美したものではない。永遠にわたる眞人の眞生活を彼は思うたのである。「人類は地に定住して天を忘れてしまつた」とは、彼の眞精神を語る警句である。あまりに地に膠着せる現代人の生活——地に快樂を滿載して天國と化せんとする現代文明——が人より眞の靈的思想を奪ふことを彼は懼れた。かくて彼は原始生活を主張した。

思想に於て勁拔なるは、人物に於て勁拔なる所以である。團體的喧噪に對して個人的靜寂を主張し、文明の複雜に對して原始の單純を唱道したる彼は、之をみづから常に實行せしのみならず、特に二年間をヲルデン池畔の林中に獨居して、その全き實現を計つた。此時の實驗と感想を筆にせるものが、有名なる『ヲルデン、一名林中の生活』である。此事すでに甚だ奇拔である。のみならず奇行は彼の生涯に少なくない。ヂョン・ブラウン大尉が暴動を起して、將に死刑の判決を受けんとする時

に、彼は同情と憤慨に驅られて、友人の忠告を耳にもかけず、獨り立つて公開演說を試み、熱辯を以て大尉を辯護した。辯に咄なりし彼も、義のためには舌端に焰を燃やすのである。又メキシコ戰爭を不義の戰として戰時稅を拒みし時、彼は牢獄に繫がれしも、平然として介意せざるが如くであつた。親友エマスンが獄舍に彼を見舞ひて「デーヰッドよ、何故に君はこんな處へ入つたのか」と問うた時、彼は「ラルフよ、何故君は入らぬのか」と反問した。けだし戰時稅を拂ひしエマスンの態度を、暗に批難したのである。彼の家族が代つて稅を拂ひしため、彼は翌日放免せられたが、家族の此態度を彼はいたく怒つたといふことである。彼は不義の戰に贊せんよりは、獄舍に永く居らんことを願つたのである。又彼は極端に獨立を貴んだ。所屬の敎會を去り、且敎會稅を拒んだ。凡てがかう云ふ風であつた。之等はみな彼の人格の透明と勁烈とを語る閃光である。

ヘンリ・デーヰッド・トロウは右の如き人物であつた。其凡てに於て預言者的詩人であつた。彼は時代の病患を指摘し、醇眞の生活を示す眞正の預言者であつた。故

に眞正の詩人であつた。彼はエマスンの同志であつたが、其生時に於てはエマスンほどの名聲を贏ち得なかつた。これ彼の思想と態度が、餘りに公衆に超越せるためであつた。それだけ彼は純誠なる詩人であつた。彼は長い間、その著『ヲルデン』のみを以て知られて居つた。その他の彼の著書が讀まれ出したのは、やう〳〵近頃の事であると云ふ。コロムビア大學教授トレント氏は「トロウの超越主義はエマスンよりも實際的であり、その思想はエマスンよりも中實があり、その學識はエマスン以上である」ことを述べ、且トロウの名聲は遂にはエマスンを凌駕するに至るであらうとの推測を下してゐる。この推測の當否は時の定むる處にして、我等に關係ない。たゞ余が心には、エマスンよりもトロウは甚だ近く住むのである。必ずしも余の現在の生活が稍彼の生活に似てゐるからではない。彼の一言一句が余を解放し、余を奬勵し、やゝともすれば自ら甲殼を造りて其中に蹲屈せんとする余に、限りなき天地の大光を示してくれるからである。――かくてトロウは余の心境に住む一人である。彼の文集は常に余の座右を離れぬのである。（大正六年五月稿）

友

上

人は社交的動物なりと或賢人は云うたとか。たゞ一人の我はあまりに寂しい。わが天性はおのづから友を求める。そして亦環境は必ず友をその要素として含む。必に於て相容す友ありて人生は樂しく、之れなくして此世はわびしい。一の親しき友は百千の親しからぬ友にまさる。親にも語り得ず兄弟にも打ちあけ難き祕事を友には告げ得る處に、友交の價値は存する。げに友交は人生の色彩である。之あつて生活の內容と興趣とは倍加する。

眼をつぶつて靜かに過去の我生を回顧し、現在のわが四圍を考ふる時、そこに友交なる一線の色こく引かれたるが眼に浮んでくる。いま此糸を少しくたぐつて見度いのである。

同窓の友と此世の人はなつかしげに云へど、境遇の偶然的一致に與へた此名に、余は多くの價値を認めぬものである。小學時代、中學時代、大學時代の同窓は、今やその一人たりとも我友ではない。そして此自然の結果を、余は自然のことと眺むるのである。併しながら曾ては彼等の間に、余の親友があつたのである。「曾ては」である、「あつた」である。「今」ではない、「ある」ではない。彼等はみな今も生きては居るが、今は余とは些小の關係もない。互に別の世界に住んでゐる。彼等はわが回顧の眼にのみ躍り出づる人物である。彼等について記すは益なきことではあるが、讀者は余が小さき回想に耽るのを許すに於て吝ならぬであらう。

Iは小學時代の親友であつた。二人は不思議に仲が善かつた。彼は清笛に巧であつた。彼は能く余を城趾に誘ひ出した。荒草離々として昔を語る中に小さき二人は坐して、彼は得意の一管を弄び、余はその悲寥の音色に聞き惚れた。二人は同時に小學校を卒業したが、余は中學の二年級に編入せられ、彼は一年級に入つた。環境の相違は二人の間を舊のごとくならざらしめた。この後はたゞ普通の友の交際であつた。余が東都に出でゝ後、父の病のために故郷に呼び戻されて其處に一年を空しく暮した時、寂しき余は度々中學五年生たるIを訪うた。余の內心には小學時代の親交を復活させ度いとの、微かなる希望も期待もあつたのであるが、舊き關係を今に引戻すことは到底出來ぬ相談であつた。二人はおのづから遠くなつた、否近くならずにすんだ。——今は彼の生けるを知るのみ、その居處も職業も余は知らない。知らうと思へば探る術はあるが、知らうと思ふ心が少しも起らない。

Sは中學時代の親友であつた。中學三年級の終まで、二人は凡ての行動を共にした。四年級より彼は東都に出でた。しかし二人の友交に變化はなく、余は彼の一年二回の歸省を待ちあぐんだ。二人が相對して語る時、二人は不思議に樂しくあつた。併し乍ら、余が中學卒業の後ち上京せし頃には、彼は既に東都書生の惡風に染まつてゐた。度々聞きたるSについての忌はしき噂の事實なることがわかつた時、余はおのづから彼との交誼を斷つた。遊蕩のうちに學生時代を過せし彼も、家に學費の豐かなれば、無事に大學を出でゝ醫學士になつた。今は某地に開業してゐるが、そ

の放肆なる生活は依然たるもので、ために門前雀羅を張つてゐるとか。——彼はいま余にとつては、厭はしき人の一人である。

Tも中學時代の親友であつた。彼は余の一級上であつて、彼は余を愛し、余は彼を敬した。幼き我に彼は偉人のごとく映じた。余はひたすら彼に倣はんと力めた。のちTは一年休學して余等の同級生となつた。この頃より二人の間は漸く冷かになつた。偉人が凡人となつたからである。共に東都にあつても、二人の間に親みはなかつた。——彼はいま東京にありて虚業家の仲間入をして居るとか。我等の住む世界がまるで違つてしまつたのである。

Mは中學五年級位になつて親友になつた男である。二人は二三年間親友らしい交をつゞけた。少年時代に有りがちな親友の誓を二人はした。しかし互に不滿の點があつた。二人は强ひて親交を裝ひ、かつ衒つた。上京ののち二人は同じ學校に入つたが、彼は余に對して甚しく冷かになり始めた。何故か彼は余を嫉(ねた)みて屢々中傷的行爲をした。もとの親友は今の敵となつた。彼は余を孤獨の地位に落さんと謀つた。

基督敎の信仰に入りつゝあつた余は、彼をそのなすまゝに任せた。しかし彼の爲す所の凡てが頗る俗惡陋劣であるを知つて、彼を嫌忌するの情は余の心に强くなつた。彼は中途退校して某宣敎師の書生となり、のち某敎會の副牧師となつた。彼が眞の信仰に入れるにあらぬことは、余に直覺せられた。後ち彼は神學生となつた。その間に政治界の片隅へなど顏を出した。素行も亂れたとか聞いた。神學生も永くはつゞかなかつたと見えて、その後彼は某會社へ出てゐると風の便りに聞いた。最近に於て、彼は鄕里の選擧運動に於て運動員の一人であつたと云ふ噂を聞いた。此の空虚なる仕事に得意の腕を揮へる彼を、余は別世界の人と見る外はなかつた。曾て最も親しかりし彼れ、いまや此世に於て最も厭はしき人である。余はこの嫌忌の情を如何ともすることは出來ぬ。

Kは高等商業の學生であつて、余が中學の上級生たりし時、ふとした事から親しくなつた友である。彼より求めた交誼であつたが、之には或事に關する政略的分子があつたので、余が上京の後二人は間もなく離れてしまつた。鄕里に於て、大なる

資産と地位とを有する家の嫡男として生れたる彼は、父の歿後その地位をそのまゝ繼いで、某銀行の重役となり、某新聞社の社長となつた。今は帝國の選良となり、某政黨の幹事をしてゐる。學生時代の功名心をそのまゝに抱いて、彼は或程度までそれを遂げた。彼は正に得意の人である。はやく此世の野心てふ惡夢より醒めたる余は、夢にありて得意となりつゝあるKを危ぶみもし、憐みもするが、少しも羨む心はない。彼が領袖株の隨行員として遊説などをして歩くことを新聞紙に見る時、余は當てにならぬ前途の榮達を望みて東奔西走しつゝある彼を、いとゞ憐まずには居られない。もしも「傳道の愚」に從ひつゝある貧しき余の噂を耳にしたならば、彼も亦余をいたく憐れむことであらう。二人の間に今何等の惡感情はない。されど、その相距る千里なるは亦やむを得ない事實である。

事情のもとに出來上りし友交は、その事情の失せると共に失せる外はない。余が右のごとく多くの親友と別れたるを捉へて、移氣を以て余を責むる人あらば、それは其人の隨意である。しかしもし余が基督敎に接せずして、又は接しても之を信ぜず

して、今日實業や政治に沒頭せるなれば、余は尙ほ彼等の多くと、或は本心より或は利用の目的より友交をつゞけ得ることであらう。しかしながら余は彼等よりは大に變つた。余は弊履のごとく彼等を捨てたのである。世に害あつて益なき事にして、無意義なる交際のごときはない。鄕黨と舊友とを悉く棄てゝ余は自由の境に入つたのである。

中

余が基督敎に入りしのち、同一の信仰を抱くゆゑを以て友交に入りしものは、其數少なくない。その全部について玆に記すことは出來ぬ。また記す必要もない。但しこゝに一言して置かねばならぬことがある。それは中途にして基督敎を棄てし者は余との友交も絕え、いま尙ほ友交をつゞけつゝあるものは今尙ほ信仰に於て立てるものであると云ふ一事である。此事の善か惡かについては余はよく知らない。よしそれが惡であつても、余は己を欺いてまで無意義の交誼を保つことは出來ぬ。「人

生は眞である、人生は眞面目である」。友交も亦人生の一部であれば、眞であり且眞面目でなくてはならぬ。

Nは余が新生の産婆であつた。彼は余に聖書と恩師U先生とを紹介した。U先生がなかつたならば、余が基督教信者とならなかつたことは慥かである。されば若しNがなかつたならば、余は基督信者になれなかつたかも知れぬ。余の生涯にとつては、彼は斯くまでに重要なる人物である。二人は同一の信仰に加ふるに共通の文學趣味を以てして、兄弟もたゞならぬ間となつた。二人は互に世話もし、世話にもなつた。重大な問題に遭逢して、甲は必ず乙の援兵となつた。彼は實に余の生涯の歴史より切り離し難き人物である。二人の友交はまことに美しきものであつた。余は靈に於ける友の價の至大なるを初て知つた。それも皆この宗教を信ぜし結果と、余は感謝措くところを知らなかつた。親鸞上人が「同行」と呼びて同信者を重んぜし心理狀態も、少しはわかつた。

Nが渡米して後、二人の間は何といふことなしに次第に疎遠になつた。筆不精の

余が、その大部の罪を負ふべきであるかも知れぬ。しかしNが北米實業國の滔々たる物質的風潮に感化せられて、事業熱の犯す所となつたのも亦原因である。——二年前、Nは横濱の埠頭にその姿を表はした。二人は手を取り合つて喜んだ。併し乍ら悲しいことに、昔の友交は復活しなかつた。Nは昔のNではなかつたのである。彼の頭も心も、事業熱の完全なる侵略を受けてゐた。彼の信仰は「自分にもまだ信仰が殘つてゐる、自分はまだ信者の積りでゐる」と云ふ位微弱なものとなつた。余は彼に對して、少からず物足らぬ感情を經驗するほかはなかつた。二人は今は信仰の友としての友交を保つことは出來ない。過去の惰力の僅かに殘れるために、二人は微弱なる友情を相互に對して抱いて居るに過ぎぬ。悲しき事實ではあるが、避け難き事實である。

Iは余より年少ではあつたが、同じくNの指導のもとに、余と相前後して信仰に入つた。期せずしてNとIと余との間に、三角同盟が生れた。主にありて兄弟なる三人は、それに滿足せずして、更に兄弟たるの約を結んだ。三人の間に何等の祕密

もなかつた。三人は凡ての事を相談しあつた。余が東都にある時Iは鄕里の中學を卒へた。學資なき彼を余は强ひて上京させた。そして余と同じ學校に入れた。自ら働き且學ばねばならぬ境遇にあつた我は、一塊のパンを二分して彼に分ち、一片の肉を兩斷して彼と味つた。ために余が人知れず涙をながしたことも、一再には止まらなかつた。物的に又心的に、辛らきことが少くはなかつた。Iも亦余の苦衷をよく了解した。二人の此時の友交は實に理想的のものであつた。時にNは既に北米にあつた。たよりなき二人は、互にひしと縋る外に道はなかつた。Iは多くの美はしき性質と共に、二三の缺點を有する青年であつた。余は彼に對して忠告することを怠らなかつた。涙を以て想起するは、余が卒業後、Iと余の弟と三人にて東京の近郊に自炊生活を營みし三ヶ月間のことである。入るべき約束の物は殆ど入らずして、余等三人は慘憺たる生活の苦を嘗めた。余は獨立の苦をしたゝかに敎へられたのである。その時Iは忠實なる余の伴侶であつた。思へば苦しくも亦樂しかりしは、此頃であつた。ことは九年の昔であるが、回想はそれを昨のごとくに鮮かなら

しむる。もし二人の關係が此儘につゞいたならば、思ふにそれは地上に於て余に與へられし最も理想的の友交であつたであらう。

しかし乍ら、事は別方面に展開した。余は去つて、東京を去る十里なる某地の中等敎員となつた。Iは上京せし伯母の保護と監督のもとに立つに至つた。余は上京するごとに彼を訪うた。しかし余の上京の回數は多くなかつた。伯母が歸國せしのち、彼は某家の書生となつた。何故か彼は次第に學校を怠け出した。つゞけて度々落第した。新聞記者となつた。信仰には遠くなつて來た。同時に余と彼との間も少しづゝ遠くなつた。彼よりの音信はパタと絶えた。彼が墮落して遊蕩者の群に入つたといふ噂などが、其のち余の耳にはいつた。余は、弱き彼が人生の重荷に負けたことを知つた。余の良心は激しく余の責任を問うた。そして「彼を深淵に投ぜしものは汝自身にあらずや」と余を責めた。明治四十四年の秋、余は退職して獨立傳道者となつた。所用のために上京せし時、Iが某新聞社にあることを聞いた。二人は久しぶりにて京橋の表通りの〇〇新聞社の樓上に相對した。IはやはりIであつ

た。しかし其の面痕せし相貌よ！そこに絶望と悲寥の氣が多分に漂うてゐた。余は心の中に「呀！」と叫んだ。

眞面目なるIは罪の瘡痍を深くも受けたのであると余は悟つた。余は彼を舊に引き戻さねばならぬと決心した。余は上京する毎に都合出來るだけ彼を訪ひ、又手紙を以て彼を慰藉して、彼が舊瘡を忘れて早く新生涯に入らんことを熱心に勸誘した。彼ははつきりした返事をしなかつた。しかし昔と變らぬ優しき心の彼に尙ほ殘れるを頼もしく思つた。或時上京して彼の家を訪うた。彼はすでに移轉してゐた。直に新聞社に行つた。彼は既にその社にゐなかつた。彼の消息は間もなく人の口より洩れた。彼は鄕里に歸つて遊蕩に日を送つてゐると云ふ。數ヶ月の後Iより突然手紙が來た。それには「自分は昔が戀しい、再び信仰生活に入り度いものだ、U先生の處へまた出入するわけには行かぬか、近いうちに上京し度いから」と云ふやうな事が記してあつた。輕々しく彼の語を信ずべきでないと思つた余は、「君に充分なる決心ありや」と云ふ意味のことを問ひやつた。答は遂に來なかつた。「あゝ」と余

は嗟嘆した。彼の手紙は彼の淡い感情の動搖を記したものに過ぎぬのであつた。何よりも望ましき强烈なる新生の決心は、彼には起らなかつたのである。

後一年、NとIとが共同して某雜誌を起したといふ噂を聞いて、二人をその雜誌社に訪ねてみた。Nは相變らず輕快で、Iは相變らず沈んでゐた。たゞIの顏に見ゆる絶望の影は、新婚の彼としてはいとゞ痛ましきものであつた。昔うるはしかりし彼の姿はどこにも無かつた。その面上のいたましき影に、彼の過去の罪と現在の苦悶とはいと鮮かに語られてゐた。Nは最早救ひがたし、Iには尙ほ一縷の望ありとは、その時の余の直覺であつた。さりながら、既に荒野の寂しさに堪へずして舊き埃及に歸りし二人と、ともかくもカナンを指して旅をつゞくる余とは、舊き友交を取戻さんとするも能はないのである。——余は此後も、時には二人と會することもあらう。また出來るだけの好意と同情とを抱かう。しかし彼等が踵を返して再びカナンに向はぬかぎり、余は彼等と眞の友交に入ることは出來ぬ。そして余の同行者が前に後に陸續たる今日、余はおのづからNとIとを忘れがちである。もし無情

を以て余を咎むる人があるならば、余はその批評を甘受しよう。しかし自己の感情を偽る生活の正しからぬことをも、同時に認めて貰はねばならぬ。

一度ともにイエスを信じて、後かれを棄て、それと同時に交誼の絶えし友は、二人の外にも少なくない。しかし今それらを細說するも益なきことである。余は現に変れる友の二三について記さねばならぬ。

下

明治三十七年の夏、余は偶然にも鄕里に於て、信州旅行中の理科大學生Pを生れて初て知つた。我家の戸口に立つた彼は、余に告ぐるに直にステーションに行かねばならぬことを以てした。二人は連れだつて歩みつゝ語つた。輕快なる東京辯のうちに何處となく重味をもつてゐるPを、余は頼むに足る人と直覺した。千山萬岳に圍まるゝ大溪谷——そこには今文明世界の町と村が立つてゐるが——の眞中に立つステーションに、天を摩する突甲、八ヶ岳、四阿等の高峯を仰ぎつゝ二人は語つ

た。南信と北信とを分つ連山を前にして、二人は信濃の地勢について語つた。二人は再會を約して別れた。目を閉づれば制服姿に草鞋穿ちたる青年のPは、いと鮮かに躍り出づる。烏兎匆々、既に十餘年は夢と過ぎた。青春の若さは絃を離れし矢の如く之れを取戻す術もない。さはれ彼時の彼の姿！ これ我心を離れぬ印象の一である。——Pと余との長き友交は、右の如くにして始まつた。

其時Pを余に紹介したのはNであつた。余はP等の組織せる或團體の一員たらんことを欲せしがため、玆にPと余の會見が行はれたのであつた。P等は當時U先生の門下に相つどへる青年學生の一團であつた。そして當時いたく基督敎に傾きゐたる余は、其團體の一員となり、且U先生の日曜講筵に出席せんことを切望したのである。

新しき秋に新しき希望を抱きて上京したる余は、Pに連れられて、P等の組織せるT.S.K.會に初て出席した。聖書の研究と感話の交換と祈禱會とが、會の重なる仕事であつた。會員は十數名に過ぎなかつた。Pは會の中心であり、指導者であつ

た。毎日曜日、午前は師の深き思想と熱火の辯に靈の洗禮をゆたかに受け、午後は郊外中野の丘上に靜かなる修養と涙を以てする祈禱に耽つた。Pはその靈味ある感話とその熱誠なる祈禱とを以て、おのづからに一同を激勵し、興作した。余の心は我とはなしに、Pに牽きつけられて行つた。年齡からも信仰からも余の長者なるPを、肉の兄を有せざる余は、他人と思ふことが出來ぬやうな氣がした。他の會員も皆余の貴き友であつたが、殊にPは不思議に余の心を捉へたのである。種々の意味に於て寂しかりし余は、度々彼を訪うて時の經つのを忘れて語つた。

明くる年の夏、Pは信仰上の或疑問を解かんことを期して、信濃の某地なる山莊に暑中休暇を獨り默想と祈禱に送つた。其時余は彼を訪うて、一夜を快談に明かした。爾來二人は益々親しき友となつた。主にありて與へられたる眞の友の有難さを、余はしみ〴〵と感ぜずには居られなかつた。

其後Pの生活には種々の變化があつた。病のために大學を去りたる彼は、この日本の最高學府に何等の未練をも殘さなかつた。職なきの寂寥は、益々彼の信仰を深

くした。後ち彼は去つて、北の方仙臺の某中學に教鞭を取ることゝなつた。あとに殘りし我等は寂しくあつた。のち又彼は、瀨戸内海の一島嶼に航海學校の教師となつた。時に余も亦東都のT・S・K・會をあとにして、〇〇縣の某地にPと等しき業に從事する身となつた。外界内界の樣々なる問題に惱まされて、信仰も精神も衰頽しつゝありし余は、信仰の勇者なるPに對して書信を發することを怠りがちであつた。併しながら、祈禱の座に於て余は彼を想起するを怠らず、そして彼も亦然ることゝ信じてゐた。

瀨戸内海の繪のごとき自然も、Pを長く引きとむることは出來なかつた。そこに彼は信仰のために激しき迫害を受けて、つひに旗を捲いて其地を引揚げ來つた。其時彼の心に獨立傳道の決心は既に出來てゐた。その時の彼として、又彼の性格より推して、どうして此ほかに行き道があらう。彼は彼の最後に踏むべき道として豫め定められたる道に、愈入り來つたのである、むしろ其遲かりしを憾む友はありしも、その早きに過ぐるを思ひし者は一人としてなかつた。雲低き七月の某日、袖ケ

浦の我僑居に絶えて久しき對面をなしたのは、Pと余とであつた。

後二年にして余も亦彼の跡を逐うた。彼は東都に、余は南總の一村邑に、共に多難なる獨立生涯を營み、多難なる獨立傳道をなしてゐる。荒野に荊棘を拓いて新たなる道路を開鑿し、藪林の荒撫を開拓して新たなる耕地を作るの快と苦とは、二人の等しく味ふ處である。二人は語り合ふべき多くの事と、慰め合ふべき多くの事とを共有してゐる。その交りはいよ〳〵深きを加へるのみである。我十餘年の信仰的生涯を回顧する時、そこに彼の我に對する影響（インフルエンス）の一線の太きを見落すことは出來ぬ。屢々我を勵まし來りし彼の書翰は、師のそれと共に、永へに我家の貴き財產を形造ることであらう。主よ、願くは更に二人の友交を祝福し給へ！

T・S・K・會の會員たりし者の中、今も尙ほ信仰の友たるものが數名ある。種々の點に於て余は彼等に負ふ所多い。彼等は余の心に最も近き人の群——その數はいと少ない——に屬するものである。彼等について語るべきことは少なくないが、今しばらく之を略して、Aに移つて語らう。

Aは今余の住める地に於ける最初の獨立信者である。從つて當地に於ける數十名の敎友の先輩である。十餘年前、我等のT・S・K・會の例會に、一寸顏を出した壯年の田舍者があつた。その農家の主人なることは彼の風采が充分に之を語つてゐた。彼は上京して其日の午前にU先生の講筵に列し、午後我等の會合に出たのである。其時余は彼をAなりと知つたのみにて、一言も語を交へなかつた。十數名の青年に一度に初對面をなしたAは、恐らく余の顏も覺えなかつたであらう。しかし乍ら、其時彼も余も、互の生涯にとつて最も深き關係を有つべく運命づけられた一人に、初て逢つたのである。

明治四十四年の秋十月——余はW大學を卒業したばかりであつた——A等は或事のために余をその地に招いた。その時余は初めてAの家に泊して、親しく彼と語を交へた。そして二人は不思議に百年の知己の如く快談した。余は彼の家を辭して、印幡沼と宗吾神社と成田不動とを見物して、東都の寓居に歸つた。しかし此等の物の余に與へし印象は、Aの余に與へしそれより濃くはなかつた。余は車中に於て、

宗吾神社にて求めたる木内宗吾の傳記を開きつゝも、思ひはAと其土地に向つて走つた。

あゝ不思議なる運命よ。今余が筆を執りつゝある此家——羈旅なる世にありて又羈旅なる生にある余と余の家族の住む此家——は、かの時A等に招かれて來りし余が、貧弱なる福音の辯明をなしたる會場と、相對して立てるものである。かの時A等と共に踏みたる土地は、今余が小なる傳道の往復に歩む所である。いま余が月に數回、福音の紹介のために立つAの家の奥座敷は、彼時余が十數分の小感話をなした所である。想起す、九年前の秋十月と五年前よりの獨立傳道とをつなぐ一線は、Aと余との交誼であつた。其間の四年を、Aの居村と十里を隔てたる都會に一中等教員として送りたる余は、A等と其土地とに交渉を持たぬわけにゆかなかつた。そして遂に獨立傳道の決心をなすに及びては、先づAの居村に近き此地を選ぶことゝなつたのである。かくてAと余とは友として、同志として、又或意味に於ける共働者として、その關係に於てます〳〵近きを加ふることゝなつた。

Aは二十年前に於ては、我生涯の據所を基督教に於て發見せんことを欲して、熱烈なる求道をなしたる一青年であつた。たま〳〵U先生の著書と雜誌は彼に至大の感激と教訓とを與へて、彼は獨立の一基督信者となつた。先生とAとの間に交誼が成立して、先生も彼の家を訪ふことがあるやうになつた。Aは獨り得し信仰を獨り貯ふるに滿足せずして、之を家族と親戚と友人とに分つた。彼等の間にも數名の信者が出づるやうになつた。これ實に此地に於ける獨立信者團體の濫觴であつた。げに一人の者が眞の信仰に於て堅く立つ時に、其勢力は無限である。

汝等目を醒まし堅く信仰に立ちて丈夫の如く強かれ、汝等の行ふ處みな愛をもて行ふべし。（哥林多前書十六章十三、十四節）

とのパウロの教訓は、まことにAの能く守り得し所であつた。

彼がクリスチャンとしての既往廿年の生涯は、土地の人に基督教の價値を知らしむるに貢献する處が少なくなかつた。余が此地に於ける傳道は、Aの「地ならし」せし土臺の上に立つての仕事である。實に余の傳道は、その有ゆる要素に於て、Aの

力に依ること十中の七八なるものである。彼は或時は我先輩である。或時は我兄である。或時は我親友である。或時は我相談相手である。或時は我論敵である。そして或時は我先生である。又我弟子である。この最後の命名は、決して彼を怒らせぬことを余は知つてゐる。何となれば安息日の集會に於て、余の拙き説教を最も熱心に聽く者の一人は彼であるからである。余は箴言記者の口吻を借りて「誰か良き友を見出すことを得ん、その價は眞珠よりも貴し」と叫ばんと欲するものである。

その他、此地に於ける余が同信の友等について語るべきことは少からねど、今暫くこれを略さう。又各地に散在せる靈の友についても、云ふべき機會はまた他日見出さるゝであらう。今は我筆は此文の結尾に向つて急がねばならぬ。

曾て某新聞紙の募集選歌中に左の一首があつた。

一人だに涙の友はなかりけり
百人あれどみな酒の友

この痛切なる告白は、恐らくは此新聞紙の讀者に、大なる共鳴を惹起したことであらう。現代の人いづれか此歎なかるべき。併しながら、心靈に於ける友を少からず有する余をして歌はしめば、正に

一人だに酒のむ友はなかりけり
百人あれどみな靈の友

となるであらう。「友は何れの時にも愛す、兄弟は危難(なやみ)の時のために生る」との箴言の語は（十七章十七節）、余に於ては「友は何れの時にも愛し且危難(なやみ)の時のために生る」と訂正せられねばならぬ。（大正五年十一月稿）

霞ケ浦邊の二日間

四月二日、余の住する地に於て〇〇〇〇誌讀者會が開かれた時、五十名近き來會者のなかに茨城縣のQ氏があつた。その時氏は余に勸むるに、氏の土地の敎友を訪はんことを以てした。「いづれ夏までには一回」とは、その時の余の答であつた。やがて夏は來た。余は是非とも行かなくてはならぬ。すなはち七月の第三日曜日をその日と定めた。ともに彼地を訪はんとする友が三名あつた。

Q氏の土地は、茨城縣の江戸崎町在(ざい)である。一行四人、一番列車に投じ、午前九時には早くも利根河畔の滑河町に着いた。それより渡船によりて對岸にわたれば、此處は茨城縣である。敎友の一人R氏はそこに我等を迎へ、我等のうち二人は初對面なるも既に十年の友の如く、一行五名眞面目なる心靈的談話を交換しつゝ、道の遠きをわすれて進んだ。大河をわたる凉風に袂を拂はせつゝ堤上を歩むこと半里、左折して一直線に低地を歩むこと一里、それより臺地にかゝりて紆餘曲折の道を歩

むこと一里餘、しかる後臺地はつきて我等は目的地に着いた。そこは小野川縁(べり)の低地にして、川をへだてゝ江戸崎町と相對する地であつた。小野川は霞ケ浦に注ぐ流の一である。しかし乍ら其下流に於ては、むしろ霞ケ浦より水の供給を受くる沼の一種であると云ふ方が正しい。此意味に於て、小野川の下流の畔に立つQ氏の家は、霞ケ浦邊に立つと云ひ得る。何となれば氏の家の裏の小野川は、實は霞ケ浦の一分湖であるからである。

主人Q氏一家の歡待に浴して疲勞は頓(とみ)に去つた。來會の敎友は十餘名あつた。Q氏の家族と同行の友とを加へて二十名の小集會、けだし理想的の會合である。午後二時半Q氏の開會の挨拶ありてのち、余は起ちて帖撒羅尼迦前書第三章を朗讀し、祈禱を終へて左のごとく語つた。霞ケ浦をわたりて來る凉風は、話者と聽者との心を清新ならしめた。

* * * * * *

基督敎の根本的敎義は何であるかといふ事は、我等の思考に値する問題でありま

す。「基督教とは何ぞや」と自ら問ひ又人に問はれた場合に、我々は即答が出來るだけに此點を明白にして置かねばなりません。有名なる『使徒信經』は當時の教會の信仰を教義化したものであつて、今たゞちに其儘之をかりかざすことは如何と思はれます。正統派の信仰箇條と云ふものについても、その六七の教條の中に、どれか一つ二つ最重要のものがある筈であります。第一問題――それを缺いては基督教は成立しないと云ふほど大切なもの――を、第二第三の問題より別にせねばなりません。然らば此の基督教の根本教義は何でありませうか。

或人は之を贖罪の教義に求めます。贖罪――キリストの十字架の代償的死――がなくては基督教は全く成立たぬ、之を信ずるのが眞の救拯である、之を信ぜぬものは基督者と云はれ得ないと申す人があります。又或人は基督教は愛神愛人に盡きてゐると唱へて、その證據として馬太傳二十二章卅七節―四十節の聖語を引きます。また其他にもその他の意見を提出する人があります。以上概ね立派な根據と理由を有する說であります。しかし今これ等について論評して居る時がありませんので、

私はたゞ私が基督教の最主要教義と思ふ者を、茲に申しあげるだけに止めたいのであります。

この問題については、新約全書が最大の憑據（よりどころ）であることは申すまでもありません。それで先づ新約全書特有の語を探つてみる必要があります。そもそも新約全書共通の語にして他の宗教になき語は何でありませうか。それは神でもなく、愛でもなく、贖罪でもありません。實に主イエスキリストといふ語であります。然らば此語は何を意味しますか。元來これは一語ではありません。「主」、「イエス」、「キリスト」の三字を連結したものであります。主とはもと神を呼ぶ語であることは、舊約聖書の明かに示す處であります。猶太人は神に對して、主よ、我主よと叫んだのであります。キリストとは希伯來（ヘブル）語のメシヤを希臘語に譯した語で、もと受膏者といふ意を有する語であります。ことにメシヤの出現を待望し居たる猶太人は、おのづから此語に救世主といふやうな意味を附したのであります。神より遣はされて國と民を淆亂より救ふ一大聖者――神の子――を此語によりて想うたのであります。そして

イエスとは唯ありふれた人名に過ぎません。例へば「ユストと名くるイエス」が使徒パウロの共働者であつた如き其の一であります（哥羅西書四章十一）。主イエスキリストのイエスは、ガリラヤのナザレに生れて大工を以て業となし、三年の間福音を説き、ポンテオ・ピラトの時十字架に釘けられた彼青年殉教者を指すのであります。そしてイエスキリストと云ふのは、此イエスてふ一青年がキリストである、即ちメシヤである、救世主であると云ふのであります。のみならず、此イエスキリストと云ふ語に、神を呼ぶ名なる「主」の語を加へて、主イエスキリストと云ふのであります。新約聖書特有の此一語に基督教の第一原理の存在を認むるは、敢て不合理ではありますまい。

次に此問題に關して、新約全書二十七卷の各卷の主意を探る必要がありますが、それは頗る煩雜である故、茲には最も早く現はれた書なる帖撒羅尼迦前書と、最後の作なる約翰傳とを調べてみたいと思ひます。前者が最も原始的なる基督教を傳へ、後者が最も發達渾成したる基督教を提示せることは、今や誰人と雖も疑ひ得な

い事實であります。

テサロニケの少數信者は、信仰のゆゑを以て誹謗迫害を受けて居ました。パウロは之を慰めて申しました「それ患難は我等に定まれることなるを汝等みづから知れり、我ら汝等と共に在りし時、我等患難に遭はんとすることを豫め汝等に告げたり、今果してその如くなれり」と（帖撒羅尼迦前書三章三、四）。そして彼は彼等に勸むるに「固く主に屬く」ことを以てし（三章八）、イエスキリストの再臨を待望すべきことを以てしました（一章三、一章十、二章十九、三章十三、四章後半、五章前半等）。帖撒羅尼迦前書の説く處は、要するに此二事に盡きてゐます。信者の特殊の患難にあること、そして主キリストを望むことに因りて患難に堪へること、これ原始基督教の最主要點でありました。

次に約翰傳についても、同一の事を云ふことが出來ます。先づ「汝等もし世の屬ならば世は己の屬を愛すべし、されど汝等は世の屬ならず、我れ汝等を世より選びたり、之によりて世汝等を惡む」（十五章十九）と云ふ語に注意すべきであります。これに似た語又は精神は、全卷に漲つてゐます。此世に於ける基督者特殊の患難の原因を

説明し得て、餘蘊ありません。そして次には「汝等世にありては患難を受けん、されど懼るゝ勿れ、我れすでに世に勝てり」（十六章廿三）の語を見落してはなりません。イエスを望むことに因つて、我等は迫害に堪へ得るのであります。何となればイエスは「我れ汝等を捨てゝ孤兒（みなしご）とせず再び汝等に來らん、暫くせば世我れを見ることなし、されど汝等は我を見る、われ生くれば汝等も生きん」（十四章十八、十九）と云ひ給ひました。即ち彼は聖靈として、彼を信ずる者の心靈に再臨し給ふのであります。此事は彼が繰返し〳〵、その別離の敎訓に於て述べた處であります（十四章十六、十七、十四章廿六、十六章七、十六章十三等）。何となれば實に彼は「道（ことば）」であります（一章）。「眞の光」であります（九、一章）。特別の意味に於て「神の子」であります（五章十九—三十）。彼は父と一であります（十章三十）。彼を見し人は天父を見たのであります（十二章四五、十四章九）。實に彼は神の遣し給ひし其獨子であります（三章十六）。約翰傳は此事を最も明瞭に説明せしものであります。

帖撒羅尼迦前書と約翰傳とを比較するに、その間に思想の進歩はありますが、その主要問題については、外面はとにかく、内的には同一であると云はねばなりませ

ん。そして我々は新約書の他の二十五卷に於ても、同樣の主意を發見するのであります。茲に於てか問題は決定したのであります。新約聖書は主として、主イエスキリストを傳ふるものであります。基督敎の根本的敎義は、イエスがキリストである、神の獨子であるといふことであります。近頃流行する語を以てすれば、イエスが神の最高顯現であると云ふことであります。聖書の語を以てすれば、彼が「神の榮の光輝（かがやき）その質（しつ）の眞像（かた）」（希伯來書一章三）であると云ふことであります。「人の見ることを得ざる神の像（かたち）」（哥羅西書一章十五）であると云ふことであります。そして基督者は主に倣うて十字架を負ふを以て、其必然且當然の運命とするのであるけれども、しかも主イエスを友として迎ふることに由つて、之等凡てに打ち勝ちえて餘りありと敎ふるのであります。

もし基督信者と稱する人がイエスの處女出生を信ぜぬと云うても、私はその理由だけを以て其人の信仰を疑はうとは致しません。イエスの奇跡を疑うても、信者たるに於て妨げないかも知れません。十字架の贖罪を信ぜぬと云うても、私は敢て異としません。如何に大膽にして自由なる批評的態度を以て聖書に臨む人あるも、私

は不信を以て其人を責めようとは思ひません。併し乍ら、もし其人がイエスの神の最高顯現たるを否定して、彼を以て單に聖人又は偉人の一人となし、吾人は彼を「主」として崇拜し且信頼するの要なく、唯その教訓を遵奉さへすれば宜いと唱ふるならば、其人がたとへ曠世の碩學であつても、又稀有の大人格であつても、私は彼に基督者の名を附することを拒むものであります。もし又信仰獲得の途上にある熱誠摯實なる青年が、所謂基督教々義の他の凡てを承け納れても、イエスが人に顯はれし神の姿であることを信ぜぬうちは、私は「未だし」と斷定せずには居られぬものであります。實に此眞理は基督教の據て以て成立する根本的教義であつて、之なくしては基督教はないのであると、私は思ふのであります。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

こゝ迄説くに余は三十分を要した。余が講話の主意は之で明かになつた。これより以後は蛇足である。併しながら話者は往々にして蛇足のために、ヨリ多くの時間を費さねばならぬものである。余も亦この蛇足のために一時間を費した。いま其大

意をごく〳〵簡單に左に記してみよう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

イエス自らが神の獨子――神の代理者、神の最高顯現、神の眞像――たる自覺を有してゐたことは、有名な事實であります。これは四福音書の各處に於て明かであります。そして「父と我とは一なり」と斷言したる彼は、その生涯の事實に於て慥かに然ることを自證してゐます。實に彼の生涯に於て、彼が常に天父と共なりし一事ほど明瞭なるものはありません。これを取去るとき、彼の生涯と人格と事業とは成り立ちません。これ實に、イエスの無私の生涯が大感激を人々に與ふる根本的原因であります。人は其處に於て、人らしきものを見ずして、神らしきものを見るのであります。神の大愛そのまゝの生ける發現を見るのであります。誰人も企て得ぬ一種特別の靈光が、彼の身邊より發してゐるのであります。茲に於てイエスを以て神の「生き寫し」と見なすも、誰か怪しみませう。實に「未だ神を見し人あらず、たゞ其生み給へる獨子、即ち父の懷(ふところ)にある者のみ之を彰(あら)はせり」(約翰傳一章十八)とある通り

であります。まことに神を直接に見ることは人には出來ません。我等はたゞ神を感ずるのみであります。しかし見度いと云ふ希求は、胸に一杯であります。見たい彼を見ることは出來ません。逢ひたい彼に逢ふことは出來ません。我切なる思慕の情を如何にして滿たすことが出來ませうか。せめて彼が彼の寫眞を我に送りくれるならば、我は之を彼と等しき者と思うて、彼に逢ひ得る喜悅の日までは、之を彼に代へて肌身はなさず持つてゐたいのであります。是れせめてもの我慰藉であります。そしてイエスは此の如き神の寫眞であるのであります。かく信じて我等は初て安くかく信ぜぬうちは我等は寂寥に堪へぬのであります。實に神は我心靈の戀人であつて、我は或日までは此戀人に親しく會ひ得ざるために、彼は我を憐んでその寫眞を我に賜ひ、我は此寫眞をひしと胸に抱いて、さながら彼自身に會ふの感を抱くのであります。かくて滿足するのであります。私が聖書に依りて學びたる基督敎の根本的敎義、また私が自己の心靈に於て味ひたる福音の中心的生命は、これの外ではないのであります。

まことに神の顯現者を求むるは、萬人共通の要求であります。明治天皇が神と崇められ、乃木大將が神と慕はれし如き、何れもこの要求の發露であります。それは之れなくしては、人の心が安んぜぬからであります。さればこそ各宗敎は、何れもその「神の顯現者」即ち現人神を有つてゐます。佛敎に於て、釋迦が如來の顯現と見らるゝは、人の知る處であります。又神道に於て、神武天皇及びその子孫たる日本皇帝を現神人と見るとの意見を提出する人があります（筧博士の古神道大義を見よ）。これは當然のことで、毫も異とするに足りません。苟も宗敎と稱する以上は、その信ずる神の最高顯現者を持たねばならぬのであります。たゞ問題は誰人が眞正なる、又はヨリ眞正なる、又は最も眞正なる現人神であるかと云ふことであります。文字通り最高顯現者は誰であるかと云ふ點が、問題となるのであります。之に依りて各宗敎の優劣が定まるのであります。

この問題を解決するについて、私は少くとも二の標準があると思ひます。一は各宗敎の現人神中にて、誰人が最も多く神らしき特色を備へてゐるかと云ふ點から判

斷するのであります。二は誰人が最も完全に吾人の心靈的要求を充たすかといふことを、批判の標準とするのであります。そして此二方面から見て、われ等はイエスが神の最高顯現者なることを信ぜぬわけにはゆきません。第一、彼は如何にも神の獨子であります。天より降りし其儘の至醇性が彼にあります。他の聖人が修養の結果己れを磨きあげたのと比して、彼は天然ありのまゝにして如何にも莊大であり、崇高であります。何等人工的彫琢を加へずして、不思議に彼は至聖であります。釋迦を筆頭とする他宗の現人神が、地上の最も美はしき花であるならば、イエスは明かに天上の星であります。その光輝には一種特有の美と聖とがあります。そして若し地上の花たる彼等は、人類の最も美はしき方面を代表さすべく人類の生み出した る至寶であるならば、天上の星たる彼は、まさに天界の榮光を示すべく此世に降りたる靈光であらねばなりません。第二に、彼が最も完全に吾人の心靈的要求を滿たす者であることは、疑ひ得ぬことであります。他の聖者も吾人の或種の要求を充たしませう。併しながら人間の最も深き、且最も根本的なる要求たる心靈の飢渇を完

全に醫やす人は、思ふに彼のほかに有り得ますまい。尤もこれは個人の直接經驗に訴ふべき問題であるので、我々は自己の所信を人に強ひやうとは致しません。もしイエス以外の聖者に依り頼みて、十全の心靈的滿溢を得てゐる人があるならば、それは誠に慶すべき事であります。しかし其人の心靈的要求がどこまで深きか、又高きかゝ問題であります。とにもかくにも私は自己の實驗に訴へて、イエスを以て神の最高顯現と見なすものであります。そして此眞理が古來多くの善良、誠實、優秀なる紳士淑女（その中には多數の偉人烈婦を含む）に承け入れられつゝ來りしことは、私の信念を大に強むるものであります。

此の神の獨子を發見し、之を迎へて我心靈の主君とする事、之が基督敎的救濟の根本要件であります。之あつて我等は全く幸福であります。何となれば、之さへあれば、凡ての他の不幸に勝つ事が出來るからであります。之なくして我等は全く不幸であります。何となれば、多くの人の求むる此世の幸福なるものが、人に眞の滿足を與へないからであります。人の成功失敗は之の有無によりて定むべきでありま

す。他の標準を以て人の幸不幸を判定するは、全き過誤であります。パウロの如き此世の標準を以てすれば、艱難の連起を以て立派な不幸の人でありますが、「凡てのものを損せしかど……キリストを獲且つ……キリストの中に居り」て大歡喜の中に安住して居ました（腓立比書三章九）。彼は實に我等に範を垂れてゐるのであります。彼にならつて我等も完き幸福に入ることが出來ます。實に「キリストを獲且つ……キリストの中に居り」て、人生の目的は達せられたのであります。之に由て人は神に接して、人たる本來の道に入つたのであります。以後はたゞ感謝につぐに感謝を以てするのみであります。イエスが神の獨子であること、これ基督教の根本的教義であります。そして此眞理を承け入れて、彼を我心靈の奥殿に迎へ奉つること、これ基督教的救濟の根本義であります。私はかく信じて、斯く唱ふる者であります。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

講話は終つて、後は談話の交換となり、晩餐の後、また各自眞面目なる感話が交換された。みな貴き靈的實驗の提示であつた。來會者が月を踏んで歸りしは午後十

時、われ等も亦樂しき十時間を過ごせし後、何處も同じ月影のゆかしきを眺めて寢に就いた。そして翌日は、霞ケ浦の瞥見に水國（みづくに）の秋を偲（しの）びつゝ、附近の探勝に心を洗ひし後、往路をそのまゝ歸路として家に歸りついた。二日間を樂しく且意味ふかく送り得しことも、亦これ神の恩惠の斷片である。（大正五年八月稿）

余等の此訪問を機緣として、この地に獨立信者の一團體が生れた。そしてその後、余は毎月一回づゝ此一團を訪ふことゝなつた。雨の降る日も風の吹く日も――同じ鐵路の三等客車に躍り、同じ淋しい道を徒歩して。そしてはや一年の上になつた。余は僻遠の地にある此一小團體の發達を、ひたすらに祈りてやまぬものである。（六年十月校正の日）

壞滅の外にありて

吹雪

大正五年の歳暮より六年の初頭にかけて、わが北日本は未曾有の大吹雪に荒らされた。日々の新聞紙は、災害の尠からぬを傳へた。けれども南日本には、晴天が打ちつゞいた。余の住む地方にありては、どもすれば黑潮と南日の暖氣が、陽春のやうな一日を生んだ。たゞ烈しき北西の風が地を拂ひ、樹を動かして、北日本の消息をもらす日が多かつたのみである。

中央山系に依て分たるゝ一小島嶼の北と南に、これ程の差異があるを見れば、歐洲の大吹雪が數年間荒れ狂へるにもかゝはらず、太洋と大陸とを以てそれを隔つる我日東國民が、泰平の夢に醉へるも事の自然である。但し南方の民も、吹雪を通して來る北西風の寒さを感せぬわけにはゆかぬ。青島戰爭もあつた。忠良なる臣民の

若干は、そこの海と陸とに貴き命を委した。そして今や同胞の或者は、戰艦に乘つて地中海まで遠征してゐる。はやくも殪れし將卒がある。遺族の涙はまだ乾かない。しかし他國の大吹雪は、自國の大吹雪ではない。北西風は如何に荒れても、南國を照らす日の光には變りはない。みづから大吹雪の重圍に落ちては、必死の努力が冷靜なる判斷を奪ふ。既に大吹雪に圍まれし歐洲人が、その中より脱れんとして狂亂に狂亂を重ね、益々壞滅に近づきつゝあるは、憐むべくして咎むべきでない。たゞ咎むべきは、この大吹雪を誘ひ起したる彼等が多年の不信と至愚である。それにも增して咎むべきは、吹雪のそとに在りながら、吹雪のなかに在るが如く狂奔せる我國人の墮態である。

歐洲の大禍亂は、我國に豫想外の富をもたらした。わが民は歐洲人の血の價に肥えふとつた。それは避けがたき事であつたらう。しかし問題は尙ほ殘る。その富を以て我等は何を購つたかゞそれである。新たなる大學は現はれたか——否。新たなる高等專門學校は生れたか——否。新たなる精神的事業は起つたか——否。新た

なる博愛事業は企てられしか——否。物質上、精神上に幾多の難問題を控ゆる我國が、その一なりとも之によりて解決せられはしない。文化に貢献する一物たりとも、之に由りて得られはしない。得たものは民の濫費と、驕奢と、墮落とである。風俗の汚敗である。道義の衰退である。眞摯と堅實との消失である。之に加へて、輕佻なる思想の勃興である。獸力崇拜の湧起である。トライチェケ、ニイチェの流行である。侵略主義の哲學的高調である。そして農夫と貧民と寡婦と孤兒とは、富豪と軍人と政治家と及びそれに和する文士とより、一顧の情をも受けぬのである。彼等は困憊せる瘠馬を危地に放ちて、その特愛の主義のための犧牲となし、自らは高欄に凭りて之れを眺めんとするのであるか。民衆の疾苦が顧られざる時に於て、未だ曾て眞正の國策の樹立せられしことはない。

昔、イスカリオテのユダが主を賣りて得たる金は、血の價なればとて、祭司等によりて旅人を葬る墓地を購ふ資とせられた。血の價に肥りつゝある我同胞の或者は、これを以て己が滅亡の日を早めつゝ、自己の屍體を埋める墓地を求めてゐる。

狂と云はんか、愚と云はんか、責むべきか、憐むべきか。われ等は天を仰いで長太息するのみである。

余は日本國を切愛するものである。その民は余の同胞である。その國土は余の生を享けし處である。之を愛さないで居られようか。世界人類を切愛せしドストイエフスキイは、それにも增して自國とその民とを切愛した。人類の一員たり世界の一人たるを拒むことの出來ぬ余は、同時に日本民族の一人たるを忘るゝことは出來ぬ。余はまた日本國の歷史を尊重する一人である。そこに多くの惡き事實と惡き思想とがあつた、しかし多くの善き事實と善き思想とがあつた。そこに多くの奸者と惡人とがあつた、しかし多くの義者と善人とがあつた。日本民族が歩み來たりし二千六百年の過去を振りかへり見て、余はわれ等の祖先の努力を感謝するに吝ならぬ。さはれ過去は既に過去である。我等の前には現在と未來がある。この現在と未來とのために、如何なる理想を懷抱し、いかなる進展の目標を定むべきか。これ日本民族とその歷史とを愛する者の解決すべき根本問題である。根本定まらずば、眞

個の國民教育の行はれよう筈がない。牢乎たる不易の理想、民族に存せざる時に於て、浮薄にして寸時的なる時代の惡潮を堰きとむる道はなく、指導階級まづ眞先にこれに投じて、衆民の盲從を强ふるに至る。何等大なる民族の耻辱ぞ。

余は日本民族を愛するが故に、吹雪の外にありながら吹雪の中にある如く慌てふためく同胞を責めるのである。人よ、時代の大潮に和せざるゆゑを以て、余を責むるに非愛國の名を以てする勿れ。（大正六年七月稿）

戰ひ

戰ひ、砲丸と爆彈と肉と血を以てする戰ひ、これが人生の凡てゞあらうか。人は戰のために生れ、戰のために生き、戰のために死するものであらうか。

職業的軍人、ことに其の高位にある者は、頻りに軍國主義を唱導する。國家の存立は陸海軍による、故に國民は陸海軍のために存するものであると。これ彼等の論法である。恰も道德家が人生の基礎を道德に置くが如く、恰も宗教家が人生の基礎

を宗教に置くがごとく、かれ等は人生の基礎を戰爭に置かんとする。彼等は軍隊に一國の主座を與へて、殖產、興業、政治、道德、宗教等をして悉く其侍女たらしめんとする。（彼等の或者が日蓮主義などを唱導するのは、此思想より出たのである）。如何に軍隊が護國の器なりとは云へ、之はまた餘りの橫議と、憤る人もあらう。しかし彼等は戰爭を以て職とする人々である。そのために國家より高い俸給を貰つてゐる人々である。彼等が軍隊萬能主義を唱導し、又實行しつゝあるは、その職務に忠なる所以と見ることも出來よう。憤るべきは彼等でない、彼等以外にある。

英國の文士にSなる人がある。彼は二三年前より日本に來てゐる。Sが日本の土を踏んで間もない時の頃、余は某農村の砂地を歩みつゝ彼と語つたことがある。たま〳〵二人の間に、人口過剩と云ふ話題がもち上つた。Sは日本の過剩人口を如何に處分すべきかと問うた。余は何心なく、彼等の或者は臺灣に、或者は朝鮮に、或者は滿洲に行きつゝあると云ふ事實を示して、答辯とした。Sは一歩深く斬り込んで來た。他國の領土を併呑して人口過剩の難問題を解決せんとするは果して如何、

恰も人の田地を盜みて之より得たる收穫を喜ぶの類に非ずやと。Sは非戰論者であつた。鋭き太刀先！　併したぢろいたは束の間、彼の揮ふ利刀を奪つて倒しまに彼に斬りかける術は、我にあつた。余は答へた、されど是れもと貴國爲政者の長年執り來りし政策に非ずやと。Sは其時沈着いた聲で答へた、然り、歐米の諸國は貴國の敎師なり、貴國はたゞ眞似をなせしに過ぎずと。其時Sは明かに、自國を初とし文明諸國の爭つて執り來りし侵略政策――帝國主義――を彈劾したのであつた。余の信ずる基督敎はSの信ぜぬ處であるが、侵略主義の排擊に於ては二人は全く一致してゐた。

しかし世は遷る、人は變る。Sは今やその快筆を以て、獨逸の攻擊と英國の辯護に全力を盡してゐる。彼は多年自國の執り來りし侵略政策を悉く是認して、敵國のそれのみを暴擧として否認してゐる。印度攻略、支那侵蝕、南阿奪領等に毫も自國の惡を認めずして、ひとり獨逸の帝國主義のみを人道違犯の擧となしてゐる。我等は獨逸の手の血に汚れ居るを充分に認める、そして責める。しかし大英國は果して

白き手の所有者であらうか。そも〳〵侵略政策に於て虎狼飽くなき慾の出口を求めたのは、英佛を最先とするではないか。これ史の明記する所である。獨逸は千八百七十一年に統一せられて國をなしたるもの、其時英佛露等は既に尨然たる屬領を擁する大國であつた。後れしかと、獨逸は慌てゝ先輩の後塵を逐うた。有る者は落着いてゐる、無い者は慌てる。盜賊も盜んだ財を積んでしまへば、一廉の紳士である。しかし無一文の盜賊は、どこまでも盜賊である。乙が甲を羨む時に、其魔の手の一入辛辣に動くは、已むを得ぬ所である。親が放蕩をする、それを小兒の時から眺めてゐた子が成長すると親を眞似る、分別盛りの親より無分別な子の放蕩は少しく烈しい、と云つて親に此子を責める資格があらうか。余は獨逸のために辯護するのではない。誰か不良青年を辯護し得よう。余は唯、不良青年を責めつゝある不良老年の、自家撞着と厚顏無耻を指摘するのである。

一年の時を間に置いて、その初に於て立派な世界人であつたSは、その終に於て立派な英國人になつてしまつた。立派な非戰論者は、立派な愛國者となつてしまつ

た。立派なカアライル主義者は、立派なニイチェ主義者となつてしまつた。しかし余はSのみを咎めようとは思はない。ベルグソンも、オイケンも、今や主戰論を鼓吹しつゝあると云ふ。『戰の上にあれ』を叫ぶロマン・ローランは、歐洲に於て唯獨り殘りし純平和論者であると思つたのは余の誤りで、彼も亦獨逸攻擊の火の手をあげてゐる。禍が自家の上に振りかゝれば、心の平衡を失ひ易い。恐ろしい渦卷の中に落ちて、慌てない者は少ない。血と火と砲聲の中に暮す彼等の變說を咎むるは、同情の少ない行爲であるかも知れぬ。五分の憤りと五分の寬恕とを、余は彼等に對して抱く。

Wは十年前に於て、余の信仰の友であつた。彼がキリストの非戰主義に立脚して軍職を拋つたのは、日露戰爭の直後であつた。それ程彼は熱烈にして徹底せる平和論者であつた。後Wは洋行して、神學校に學んだ。歐米の哲學、文敎、思潮を究め來つた時、福音の好戰士をWに於て見出し得んとは、友の等しく豫期した處であつた。實に彼はそのために、長い犧牲と腦力とを捧げたのである。併しWは友の期待

に背いた。ニイチェはイエスに勝る彼の主となつた。Wは猛烈なる主戰論者となつた。戰爭は人類が進步のために拂ふ當然の代價なりと、彼は力說しつゝある。そして平和の福音と、その信者及び唱道者を、嘲笑しつゝある。Wは飽くまで眞面目である。飽くまで熱誠である。同時に彼は戰の使徒である。奪掠慾の鼓吹者である。Yは十年前に於て同窓の友であつた。卒業の間近に彼は基督信者となつた。間もなく洋行して神學を專攻した。そして今はWと等しく、講壇と筆とを以てする戰爭の鼓吹者である。記憶せよ、二人とも神學專攻者である。

WとYとは、偶々余の視界を過りし少壯學者である。もとより二人が、日本國に於ける除外例ではない。二人は我國時代思潮の一斷片に過ぎぬ。今や我國に於て、軍國主義の大潮流は滔天の勢を呈してゐる。そして夫れはたゞ、歐洲大混亂の餘波を無批評に受けたものたるに過ぎぬ。戰亂の渦卷に立つものが興奮して我を忘れるは、まだしも恕し得る。渦卷の外に立つて冷靜なる傍觀と批判の態度を取り得るものが、熱狂躁佻、小かなる餘波に呑まれて自ら溺れんとするに至つては、其愚や及

ぶべからずである。我國は此大戰に參加せりとは云へ、國家の運命を賭して戰ひつゝある歐洲諸國に比する時、日本民族は事實に於てむしろ傍觀者である。そして徐ろに戰亂の原因と經過と實狀とを觀察して、冷靜なる攻究を續け、然る後民族前進の方向を定むべき利便の地に立つ。獨逸帝國の運命いまだ逆賭すべからざるに、何を苦しんでか獨逸崇拜の愚を演じ、侵略主義を以て民族前進の旗幟となすの輕舉に出づるか。亞細亞モンロー主義と叫び、汎亞細亞主義と唱ふるもの、何れも是れ歐洲軍國思潮の鵜呑みではないか。

戰は皆愚かなるものである。しかし現在の歐洲大戰亂ほど愚かなる戰が、曾て此世にあつたであらうか。これ獲物を爭ふ猛獸の鬪很(まうこん)である。そして得る所は何ぞ。何れも其目的を達するほどには至らずして（尺寸の土地の得失はあらんも）、遂に引分(わけ)の結果に終らんとは、心ある觀察者の一應に認むる所である。嘗て十六世紀に於て西班牙王カアル五世と佛蘭西王フランシス一世は、二十四年にわたる大戰をなした。その結果は二人の領土を戰爭前と殆ど同一に止め、そして其害惡は絶大であつ

た。此度の大戰亂も、得る處は交戰國の大疲弊と、幾百萬人命の喪失のみであらう。「兩虎相鬪ふ、勢ひ俱(ともに)に生きず」と支那の史家は曰うた。今や兩虎共に數十の創傷を身に負うて、進戰の餘力を餘さず、氣息奄々の日も遠からずと思はる。實に民族渾身の力を擧げ盡し、國の精華を悉く涸らして、得る所は零細云ふに足らざる有樣である。輓近武器の進歩は、戰爭をして喪ふ所無限にして得る所皆無ならしめつゝある。戰爭は今や此世に於て、最も愚なるものとなつた。結果は唯傍觀者を成金國たらしむるに過ぎぬ。これ此度の大戰亂の極て明白なる敎訓である。誰か云ふ、戰爭は人類進歩のための代價なりと。人類を虎狼の道に逐ひやりてその進歩を實現せんとするは、聖賢たらんために盜人たるを選ぶと同一である。見よ、歐洲大戰亂は、世界各國の民を悉く墮落の野に逐ひやつたではないか。かくの如くにして、いかで人類のために光明の路を拓き得よう。げに非戰主義は此度の戰禍によりて、極度の明瞭を以て立證されたのである。

而して此愚かなる戰の眞相は、いふまでもなく、歐洲諸强國が長年執り來りし侵

略政策の衝突である。汎スラブ主義、汎ゲルマン主義、英佛多年の殖民政策、いづれか是れ侵略政策の別名ならざる。侵略政策を執り來りし歐洲の爲政家は、茲に總勘定の座に逐ひやられたのである。此時いかに腦漿を絞るとも、支出が收入を無限に超ゆるを如何ともすることは出來ぬ。茲に軍國主義は、最後の審判を受けつゝあるのである。そして天國門外の幽暗に逐ひやれて、哀哭切齒し、惡魔と其使者のために備へたる熄えざる火に入れられるのである。然るに今にして尙ほ且、これを以て人類を天國に導かんとする者が、限りなく多數にある。何等の痴、何等の愚ぞ。

そも〳〵時代の惡しき潮流に逆ふを以て、思想に生くる者の本務とする。時代思潮は衆愚の聲、凡俗の叫である。これを導くものは、其日其日に生くる新聞記者である。併し思想の人は、永遠を以て生命の範圍とする。故に永劫不磨の眞理を提げ來つて、時代の謬想をたゝすが、その職務である。詩人と思想家と預言者とは、天を以て生命の在處とする。故に天來の靈光を召び降して、地上の泥土を照らすを其の天職とする。されば思想の人は民族の支柱である。民族の墮敗を戒め、進展の本

道を示すは彼等である。然るに彼等が此聖職を棄てゝ、民衆荒惑の使嗾者となる時、彼等は即ち僞の預言者となつたのである。ユダヤの歴史を見よ。民族が四隣諸國の風潮に侵されて、偶像崇拜と事大思想に感染せし時、この時代の潮流に乘りて民と權者に媚ぶる僞預言者の大群に對して、之に逆ひて人類永遠の本道を示せしは眞の預言者であつた。今や我國は昔時のユダヤである。歐米の惡潮流は入り來つて、それが民族の時代思想となつてゐる。之に逆ひ、之を戒むるは、思想に生くる者の本務である。古へのユダヤに於て、幾度も國の壞亂を止めしは、思想に立つ預言者であつた。我國に於ても、澎湃たる時代の大潮に抗して大禍を未發に防ぐは、思想に立脚する者の責務ではないか。あゝ僞りの豫言者は、雨後の筍の如く多し。眞の預言者は未だ出でざるか、出でしを世の認めざるか。たゝ上下を擧げて濁流に漂へる有樣のみぞいと著き。（大正六年七月稿）

潮流を下瞰して

大潮流が恐しい音を立てゝ渦巻き流れてゐる。その中に澤山の船がある。いづれも滿員である。あまり人が多いので、嵯れて、檣柱に攀ぢのぼつて居る者も少なくない。手欄にぶらさがつて、海に落ちさうにして居る者も隨分ある。船の中には指揮者らしい者が數人あつて、交る〳〵公衆に向つて演說をしてゐる。船のそとにも、即ち海の中にも、無數の人が浮いてゐる。いづれも一所懸命に泳んでゐる——船上の人たちに勵まされたり、叱られたりし乍ら。もう疲勞して溺れかゝつてゐる者もある。既に溺れてゐるものもある。船中船外、人の數は限りなく、その態は皆異つてゐる。たゞ彼等の全部に共通してゐる一點がある。それは何れも潮流と共に動きつゝあることである、潮に乘つて進みつゝあることである。併し例外は何物にもある。稀に、極めて稀に、潮流に逆つて泳ぎつゝある人が見える。その人たちは勇士の相貌を備へてゐる。しかし其の苦難、その疲勞、見るも痛ましい。

巨大なる巖が海中に屹立してゐる。海にくらべれば、勿論、いたく小さい。けれども其頂は雲をつんざいてゐる。天に達してゐるのかも知れぬ。ゆゑに無數の人を

宿すに足る。然るに打見た所、此巖に乘つてゐる人は甚だ少ない。その少ない人が潮の中の人を頻りに手招きしてゐる。潮の中の人は、大低は知らん顏して行き過ぎてしまふ。又は、冷笑を巖上の人に投げて行き過ぎてしまふ。たゞ稀に、たゞ稀に、船中から又は海中から言はせたゞけて行き過ぎてしまふ。たゞ稀に、たゞ稀に、船中から又は海中から泳ぎ來つて、巖にのぼる者がある。そして來る者は、いづれも必ず獨りで來る。巖上の人は、擧つて新來者を歡迎する。巖の表に記されてある文字は、いと鮮かに「永遠の磐」と讀める。

永遠に流れてやまぬ大潮流、永遠に立つて動かぬ巨巖——これ此世の二大對立である。海は云ふまでもなく此世を標徵する。巖に立ちしものは、何れも其巖の天に達するものなるを知つてゐる。之に反して潮流に流るゝ者は、自分が潮流の中に在ることをすら多くは知らぬ。ましてや其の潮水が那落の底に向つて進むを知る者をや。しかし巖上に立つ者は、大海を一目に見渡すことが出來る。のみならず、立場の安定と心の落着が眼の曇りを取る。彼は潮流の性質を知り得る有利の位置に立つ

のである。

こゝ迄說き來つた余を捉へて、君は何れに屬するかと讀者は問ふであらう。余は明かに答へて曰ふ、自分は巖上に立つ一人である、從つて潮流を看得る有利の位置に立つと。巖上にある余の位置は甚だ低くして、脚下を流るゝ澎湃たる大波に、やゝもすれば海中に押し流されんとする。しかし同時に、脚下に渦卷く潮流の恐ろしさを見ぬわけには行かぬ。

此世は常に潮流の洗ふ所である。その潮流の名稱は、時代によつて異つてゐる。しかし其實質に變りはない。永遠に流れてやまぬ潮流！それに人は種々の名をつける。そして己の獨創を誇る。いづくんぞ知らん、凡てこれ常に等しき大潮の別名なることを。今や廿世紀の大潮流は、民族主義である。そして民族主義とは、大帝國建設の理想に外ならぬ。スラブ民族主義、ゲルマン民族主義、伊太利民族主義、大英帝國主義、其他各國の帝國主義、いづれも是れ大帝國建設を以て國策とするものではないか。かくして是れ、舊き古き侵略政策の別名に外ならぬではないか。獨逸

の軍國主義を懲すために立てりと稱する歐米各國は、今や獨逸と等しき軍國主義を採るに至つた。見よ、人權尊重の美名に由て獨逸の徵兵制度を野蠻視し居たるアングロ・サクソンの二大國は、遂に徵兵制度を敷くに至つたではないか。殊に米國の如きは、沒義道にも、國內に一時居住せる他國人をも、强募せんとする態度を示すほどに至つたではないか。獨軍の毒瓦斯を咎めたのは一時のこと、彼等も亦、これ及びこれに類する兇猛なる方法を用ひて戰ひつゝある。毒を以て毒を制すると、彼等は云ふであらう、しかし彼等が今や、獨逸と等しき毒を用ひつゝあるは事實である。そして、是れ決して怪しむべき事ではない。彼等がその假面を脫したに過ぎぬのである。獨逸の假面をかけぬ軍國主義に對して、彼等は文明、正義、人道、平和、博愛、自由、民權等あらゆる都合のよき假面をかけて、軍國主義を永年實行しつゝあつたのである。そして時來つて、遂に其假面を脫したのである。歷史を見よ、歷史を見よ。歐米各國が建國以來、軍國主義に立ちて侵略政策を實行しつゝ來りし事は、その各頁に大なる文字を以て記されて居る。而して侵略政策は、此世に於て最

も舊き主義である。有史以前は暫く問はず、有史以後、此主義の衰へた時は稀であつた。古代東方諸國の隆替、希臘、羅馬の興亡、東洋各國の消長——その間を貫く濃き色彩の何でありしかは、曰はずして明かである。憐れむべきかな現代の民族主義高唱者よ、卿等は舊き〳〵屍體に美衣を纏はせ、それを鞭つて踊らせようとするのではないか。鞭のあたる度に、それはよろ〳〵と怪しげに動くかも知れぬ。初からそれを生きた麗人と思つてゐる卿等は、美しい舞踏と喝采するであらう。あゝ併し恐ろしき死の舞踏よ！そして堪へ難きその惡臭よ！

侵略主義——これは此世の王と政治家の、昔より採り來りし政策である。古のエヂプト、ペルシヤ、アッシリヤ等の强大國、歷山大帝國、羅馬大帝國、サラセン大帝國、オットマン大帝國、蒙古人の歐亞兩大陸に跨りし大版圖、降つては十六世紀の西班牙、十八世紀及び十九世紀初頭の佛蘭西、現代の英吉利、獨逸、北米合衆國——數へ來れば一として侵略政策の結晶たらぬはない。そして各之を指導する英雄王、または大政治家があつた。ラメセス二世、ネブカドネザル、アレキザンダー、シイザ

ー、帖木兒、成吉思汗、豐太閤、カール五世、ピートル大帝、ルイ十四世、ナポレオン、ビスマアク、カイザル——いづれもさうでない者はない。そして現代の民族主義者がこの新しき美しき名を高唱して、意識的又は無意識的に英雄の野心遂行を扶けつゝあるが如く、過去に於ても常に、學者と稱し識者と稱し名士と稱する一群の僞豫言者が、それ〳〵美はしき名を英雄の侵略政策に與へて、之を力强く唱導し、そして短見なる民衆は之に和して祖國のために其血を湧かし、青年はその生命を棄て、かくして寡婦と孤兒の哀哭を全土に漲したことであらう。そも〳〵、侵略政策——帝國主義——の愚は、歷史の最も明瞭に證示する所、史の敎訓の他の全部を疑ふとも、之のみは疑ひ得られない。古の强大國いま何處にある。彼等侵略的英雄の建てたる邦土は今や如何。多くは滅亡、殘れるも瀕死に喘ぐ。そして彼等英雄は、多くは絶望の中に此世を去つたではないか。そしてその或者は、己の採り來りし政策を悔いたではないか。孤島のナポレオンは、暴力の基礎に大帝國を建てんとせし己の愚を悔みて、愛の礎石に世界を蔽ひ永遠を貫く國を建てしイエスを羨んだ

ではないか。佛のルイ十四世(ルイ大王)は如何。諸國に對して猛烈なる攻略政策を實行せし結果、遂に己と民との精力を涸らし盡し、一時の隆々たる聲譽より得し得意は失望、懊惱、苦悶と化して、遂に死の床まで引きづり卸さるゝに至つたのは彼ではないか。千七百十五年九月一日、彼は負債と哀苦と恐怖と不安の中に漂ふ國を、五歳の皇太子に遺して逝いた。その時彼は皇太子に何と遺言したか。

我子よ、おまへは大王となるのである。……私の戰爭好の眞似をしてはいけない。諸國との平和を持續するやう努めねばならない。……また民の重荷を除くことにも骨折られねばならない。私は此事をすることが出來なかつたのだ。

讀者よ、卿等は王の遺言を單に皇太子に對してのみのものと思ふか。否々、王は此貴き悔悟の語を、王より後に生るゝ凡ての國王、すべての政治家、すべての經世家、すべての文士、すべての學者、すべての新聞記者、すべての民のために遺したのである。しかし彼等は之に耳を傾けずして、大王ルイが悔いたる其侵略政策を眞似つゝ今に至つた。侵略政策はおのづから、强國と强國の爭鬪を惹起する。そして

世界的大戰亂は遂に生れた。大なる潮流に船を浮べて揚々たりし彼等は、遂に大なる渦卷に投じて、互に相衝突するの悲劇を演じた。彼等は渦流の中より脫けいでんと焦るも、迷亂今や甚しくして、出口は發見されさうもない。彼等は遂に大なる渦卷の呑む處となるであらうか。危ふし、危ふしと、巖上に立つ少數者は叫ぶ。

我國に於ける獨逸崇拜熱は、決して新い現象ではない。それは其軍事と敎育を見れば直ぐ知れる。併し今やその熱度が急に昂まり、且つ新しき形を以て現はれてゐる。亞細亞民族主義と云ふものもある。亞細亞モンロー主義と叫ぶ人もある。大帝國主義と唱ふるものもある。汎亞細亞主義と稱する人もある。明かに侵略主義である。けれども美はしき語を以て、何處までも文明的に飾られてゐる。殉敎的精神、犧牲の觀念、永遠の平和、人道、正義、哲學的、進步的等の語が、多分に其裝飾となつてゐる。勿論宗敎は大に貴ばれてゐる。信仰は貴いものであると見られてゐる。しかし凡てが大帝國主義の內容をなす範圍に於て、貴くあり、美はしくあるのである。宗敎と道義の產物たる凡ての良い者が、新軍國主義の內容をなしてゐる。

しかし獅子がその爪に貴い寶玉を飾つたとて、何でその獰猛さを減じ得よう。虎がその牙に美はしい色彩を施したとて、何でその恐ろしさを減じ得よう。人よ、美名に欺かるゝ勿れ。友よ、妙音に惑はさるゝ勿れ。人類の獸的本能は、不思議な通力を持つ怪物である。常にその姿態を變へて——多くの場合に於て美はしき形となつて——人を惑はすものである。

然り、要するに此世の大潮は、人間獸力の叫である、即ち惡魔の聲である。俯伏して惡魔を拜せば、惡魔は世界の國々を皆與へると、キリストに云うた。世界征服は惡魔的精神の產物である。惡魔に降服したる人間獸力の叫は、永遠より永遠に大潮流をなして流れてゐる。それの國家觀は武力的帝國主義である。それの宇宙觀は無神論である。それの人生觀は享樂主義、主我主義、强者主義、我慾萬能主義、力の福音等である。滔々として世を蔽ふ此大潮流——喜ぶにも喜ばぬにも之と共に流るゝが、古往今來、常なる人間の常である。學識とか、才幹とか、地位とか、富財とか云ふ船に乘つてゆく者は、行路の易きを喜んでも居よう。しかし之等を持たぬ

ものは、水に泳ぐの努力を自らなさなくては、潮と共に流るゝことは出來ぬ。古來、社會の下層に沈める多數の民は皆これである。上古の奴隷、中世の農奴、現代の貧民——名は變れども何れも皆、船に乘らぬ潮中の游泳者である。無我夢中に手足を動かしつゝ、潮に由て淪亡の谷まで運ばるゝ彼等は、世の最も不幸なる者である。

巖に立つ者は凡てに向て同情を惜まぬが、その最も同情を禁じ得ぬは、稀に見ゆる潮流逆行者である。彼等は世の濁流に流さるゝを快からずとして、奮勵勇進、之に逆つて遡らんとしつゝある。けれども大潮の勢は强烈である。疲勞は刻一刻、彼等の進行を沮みつゝある。降伏か死か——二つに一つが彼等の運命として殘る。たゞし其前に、永遠の磐に氣がついて、茲まで泳ぎつくものがないではない。巖に立つ人々は、凡て海中に在る者の來ることを熱望してゐる。殊に潮流を遡りつゝある勇士に向つては、巖上よりの招聲もいと强い。幸なるは早く此巖に來るものである。かゝる者は血脈に由るに非ず、情慾に由るに非ず、人の意に由るに非ず、たゞ神に由りて生れたものである。

永遠の磐に立つ者にして、こよなき己の幸福に感謝の念を湛へぬはない。彼等も前には、大潮に乘れるものであつた。「先祖より傳はりたる空しき行」の中にあつた。「此世の風俗に從ひ、かの愆と罪を行ひて日を送り……肉の慾に從ひて日を送り、肉と心の慾ふ儘をなし、他の人の如く生れながらにして怒の子」であつた。然るに矜恤に富める神は、その大なる愛に緣りて、彼等をキリストと共に生かし、彼等をこの巖に誘ひ來り給ふた。かの海中より彼等を巖上に購ひ來るために、彼は「疵なく汚なき羔のごときキリストの寶血」を代價として拂つた。故に巖上に導かれ來りし者の感謝は無限である。彼等は洶湧として巖の周圍に轟く大潮を意識する。ともすれば、海中に立つ片巖の弱さを思はぬでもない。彼等は潮流に浮ぶ無數の人を認識する。ともすれば、巖に立つ友の少なきに、淋しさを感ずることもある。しかしそれは一時のこと。伏して想ふ、我が立つ巖の下方にひろがりて無際限なるが如きを。仰いで知る、巖の頂の天に冲するあるを。かくて潮は空しく巖を嚙んで流れ、巖は永久に毅然として動かない。巖に立つ者は——その巖よりすべり落ちぬ限りは

——我故ならで不動の域に在るのである。かくて心靈の安慰いみじきを味ひて、我幸福の盃の充ち溢るゝを知り、神の與へ給ふ歡喜の彼等の穀物と酒との豐かなる時に勝れるを學び、感謝のうちに日を迎へ月を送る。そして脚下に渦卷く潮の恐ろしさを見ては、それより救ひ出されし己の幸福を思ひ、潮中に流るゝ多くの人を見ては、聲高らゝかに之を招くを以て己の務めとする。かくて巖を攀ぢのぼる我努力の微なるとも、我を上に引きあぐる力の强きを味ひつゝ、やがて天上に達する日のあるべきを思ひて、希望と期待のうちに日々の生を送る。これ永遠の磐に立ちし者に與へらるゝ妙なる恩惠である。

余は嘗て潮の中に漂ひし者であつた。もしかの儘にてありし時は余の現狀如何、想ひ一度茲に至る時は肌に粟の生ずるを禁じ得ない。されば救はれて巖上に立てる今日、感謝は限りない。讀者よ、思へ、再思せよ、三思せよ。此世は大潮と巨巖の對立である。人はその何れかに屬くほかはない。そして各々の行先は極めて明瞭である。潮と共にあるは都合よくもあらう、便利でもあらう。そこに美はしい衣もあ

るであらう。甘き食物もあるであらう。濃き酒とそれの齎らす歡樂ともあるであらう。華かなる交際社會もあるであらう。しかし何れも「淪亡(ほろび)の谷に至るまでの間」と云ふ恐ろしい條件がついてゐる。そして悲しいことには、大抵は此恐ろしい條件を知らぬのである。行手は明瞭である、運命は定まつてゐる。讀者よ、思へ、再思せよ、三思せよ。君は海中に立つ巖を知れりや。知れるならば幸なり、余はそのために君を祝する。知りて既に此巖に立てるや。立てるならば幸なり、余はそのために君を祝する。しかし君もし尙ほ潮の上にあらんか、余は君に向つて再び警告を發せねばならぬ、行手は明瞭である、運命は定まつてゐる。三度警告す、行手は明瞭である、運命は定まつてゐる。三度曰ふ、讀者よ、思へ、再思せよ、三思せよ。余はこれ以上に君に對する余の愛心を表はす道を知らぬ。（大正六年九月稿）

大正六年十一月廿六日印刷
大正六年十一月廿九日發行

【不許復製】

歩みし跡

定價壹圓也

著作者　畔上賢造
發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助
印刷者　東京市京橋區新榮町一丁目廿一番地　佐藤保太郎
發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店
電話新橋一五八七
振替東京五五三

内村鑑三、畔上賢造著（第三版）

平民詩人

四六判肖像六葉
定價五十錢
送料六錢

歐米詩人の中、最も高貴の匂に富み而も最も平民的色彩を帶べるホキットマン・テニスン・ローエル・ホキッチヤ・ウヲルヅヲス・ブライアント等六大詩人の生涯と思想と其重なる詩とを紹介す。ホキットマン論は久しく文壇に筆を絶ちたる内村氏筆になれるもの。其勁拔なる文は克く詩人が眞面目を發揮し、紙上に躍如たらしめ、且現時の米國を貶して痛烈を極む。其他各詩人の紹介論評は只管ら根本思想と特異的色彩とを失はざらんことを努めたり。來りて此の卷中に溢るゝ自由、純潔の思想に接し、六詩人と共にうたひ給へ。

カーライル原著
畔上賢造譯

クロムエル傳

上中下卷各册
金六十錢
送料各六錢
合本上製
金一圓八十錢
送料十二錢

上卷中卷に於てはクロムエル氏が代議士として將軍としての活動を精叙し、其大精神を傳へ其大信仰を述べて、遺憾なく、下卷に於ては彼が如何に公明正大なる精神を持して快力亂麻を斷つの政治を行ひしかを力說し、大宗教家の說教の如き其演說筆記を掲げ最後に臨終の狀を細述せり。

されば此書以て信仰の價値を知るべく、眞正なる政治の如何なるを知るべし、われらが人生の爲め熱誠と國家の爲めの憂慮とは人々をして本書を繙かざるを得ざらしむ。

■内村鑑三著書■

■研究十年	(三版)	正價壹圓	郵税八錢
■所感十年	(三版)	正價壹圓	郵税八錢
■舊約十年	(初版)	正價壹圓	郵税八錢
■感想十年	(初版)	正價九十錢	郵税八錢
■宗教と現世	(再版)	定價壹圓	郵税八錢
■地人論	(七版)	定價四十錢	郵税六錢
■興國史談	(四版)	定價五十錢	郵税六錢
■求安錄	(十三版)	定價三十錢	郵税四錢
■後世への最大遺物	(八版)	定價十五錢	郵税二錢
■基督信徒の慰	(十五版)	定價三十錢	郵税四錢
■傳道の精神	(三版)	定價二十錢	郵税四錢
■洪水以前記	(初版)	定價册五錢	郵税四錢
■歡喜と希望	(四版)	定價十五錢	郵税二錢
■基督教問答	(五版)	定價三十錢	郵税四錢
■愛吟	(十二版)	定價十五錢	郵税二錢

コ1142

■内村鑑三著書■

■外國語の研究（七版）定價廿五錢　郵税四錢
■警世雜著（八版）定價四十錢　郵税八錢
■宗教と文學（五版）定價二十錢　郵税二錢
■獨立清興（再版）定價十五錢　郵税二錢
■貞操美談路得記（七版）定價十五錢　郵税二錢
■代表的日本人（英文）定價五十錢　郵税六錢
■余は如何にして基督信者となりし乎（英文）定價七十錢　郵税六錢
■宗教座談（七版）定價四十錢　郵税六錢
■よろづ短言（品切）定價五十錢　郵税六錢

右の中、『余は如何にして基督信者となりし乎』は、この度紙質を改良し、裝幀に意を用ゐ、定價を金七十錢に改めて、第七版を發行。

終